
Love, Day After Tomorrow

MASATO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Love, Day After Tomorrow

【Nコード】

N5272M

【作者名】

MASATO

【あらすじ】

新志、コ哀短編集。

タイトルは倉木麻衣さんの曲から。

友達って言うほど雑な関係じゃない。でも相棒では軽すぎる。

恋人って言うほど深くない。

そんな微妙な関係のふたり。

L o v e , D a y A f t e r T o m o r r o w (前書き)

やっと・・・この小説の表題小説が完成した・・・

新志・コ哀どっちもあり。

今後修正する可能性大なのでまずは出来たてはやはやの初代をご覧ください（笑）

Love, Day After Tomorrow

叶わぬ夢なんて。

見てるだけの夢なんて。

そんなものただの『夢』にすぎない。

でもいつか叶うとしたら。

私はあなたの隣を歩きたい。

生れたときからのこの性格。

『可愛くない』なんて自覚ぐらいしてる。

ねえ・・・

そうやってまたあなたは『素直じゃない』とか。

『可愛くない』と言うけれど。

あなたは私に何を期待しているの？

私が可愛くなろうが素直じゃなからうが。

あなたには関係ない。

あなたには私に無いものをすべて持っている、天使のような彼女が居るじゃない。

私も彼女みたいにこの強がりな性格を直せたらどんなにいいか。

『なあ・・・最近どうしたんだ？そんな暗い顔して・・・』

私にそんなことを聞かないで。

理由なんてない。

本当を言えば自分がそんな顔してるなんてあなたに言われるまで気づかなかったんだから。

『心配すんじゃないよ。俺が守ってやるって言ったろ？』

何から。

何から私を守ってくれるっていうの？

そんな曖昧な言葉は要らない。

私の気持ちなんて一生かかっても貴方には分からないでしょうね。

『あなたには関係ない』

そう、関係ない。

あなたは私みたいな黒の人間と関わらないでほしい。

綺麗なものだけ見て生き続けてほしいから。

『なんだよ・・・そんな言い方ねえだろ！』

彼はかなり低めの声を荒げたので驚いて顔を上げた。

あんなに怒った顔は私は初めて見た。

あんなふうに彼に見られたのは初めてかもしれない。

恐かった。

彼の初めて見る顔。

怒らせてしまったのだ。

でも。

瞳は何故かとても寂しそうだった。

『さっきはゴメンなさい』

どうしても面と向かって謝る勇気が無かった。

だからメールでたった十文字の謝罪をした。

でも・・・逆効果だったみたい。

どんなに待っても返事が来ない。

当然ね。

彼には散々救われてるのに、あんな言葉をかけたのだから。

でも・・・

何故かだんだん視界がぼやけてきたのは気のせいじゃない。

『なんで泣いてんだ？』

突然現れて驚いて私に近寄ってきた彼。

だからお願い。

私も分からないの。

理由を聞かないで。

『ゴメンな・・・俺も・・・俺も悪かった。お前も辛いよな』

あなたは優しいから。

自分に非はないのにそうやって謝ってくれるのね。

『今度一緒に出かけねーか?』

彼がいきなり笑ったかと思ったら。

そして半ば無理矢理に来週の日曜日。

明後日、彼と一緒に出かけることになった。

ねえ。

言ってもいい?

許されるのかしら。

『あなたに愛されたい』なんて。

『どうした?』

ハッとして声の方を見る。

彼はもう玄関で靴を履いていた。

『ねえ』

言ってしまうのか。

『なんだ?』

そうやってまたあなたは私の・・・

大好きな、そして大嫌いなその笑顔を見せる。

『何でもないわ。じゃ、明後日ね』

『おう』

言いたいことがあったけど。

今は言わないでおこう。

L o v e D a y A f t e r T o m o r r o w

日曜日。

明後日私があなたにすべて打ち明ければ

あなたは私を愛してくれるかしら？

Love, Day After Tomorrow (後書き)

かれこれ5年間ぐらい倉木麻衣さんのファンでして。

ファンクラブも入ってるんですが本当にこの曲大好きなんです。

が、イマイチ小説にしにくい面がありました。

歌詞の内容が「明後日愛して」なんです、それがもう付き合ってるカップルなのか未満のカップルなのか微妙なんですね。

次回以降もよろしくです。

君との時間（前書き）

新志。まだ付き合っていない設定。

君との時間

もう五日ぐらい家に帰っていない。

寝泊まりしているのは自宅の隣の、変わった形の家。

学校から帰った時も、事件で遅くなった時も、自宅をスルーしてこの家に帰る。

「ちょっと、帰る家を間違えていない？」

そう言って真夜中に帰ってきた俺を迎えたのはかつて灰原哀だった宮野志保。

俺とコイツは半年前にお互い元の姿を取り戻した。

俺はなんとか留年を免れ無事三年に進級した。

コイツはアメリカで博士号までとっていたため、都内某所の研究所で研究員として働いている。

「まあまあ、いいじゃねーか。そんなこと言ってちゃっかり俺の分用意してくれてるし」

机の上には二人分の食事。

博士はもう寝ているのだろう。

「毎回毎回、私だって忙しいのよ？ 食事なら彼女に作ってもらいなさい」

彼女というのは蘭のことだろう。

結局半年たった今でも何故か俺は蘭に告白できないでいる。

以前格好つけて「推理の答え」なる告白の方法を作ってしまったのだが。

最近はその「推理の答え」は正しいのだろうか、と考えてしまいう自分が居る。

少なくとも蘭は俺をいまだに信じている。

たださすがに俺が出入りしている博士の家に居るコイツの存在は気になるようだ。

「いい加減彼女可哀そうよ。半年間待たされた挙句に結局また半年過ぎたじゃない」

そんなことを言うコイツを視界に入れながら結構手間のかかっているコロッケを口に運ぶ。

恐らく仕事から帰ってそのまま食事を作ったのだろう。

目の前のコイツは白のブラウスに黒の膝下丈のスカート。

ふと思った。

俺はコイツを女として見たことがあるんだろうか。
ハッキリって他に言いようのない美人だと思う。

しかし俺はコイツを相棒、と呼んだだけにホームズとワトソンのような関係で、

正直コイツを女に見たことはほとんどなかった。

しかし元の姿を取り戻し、初めてまじまじと宮野志保の姿を見た時はさすがに度肝を抜かれた。

正直俺は困惑した。

恥ずかしい話だが、今の今まで客観的に見て「この人可愛い」とか「綺麗」と思ったことはあったが、

胸がときめくような思いで「可愛い」とか「綺麗」と思ったのは蘭以外居なかったからだ。

コイツの姿は俺には後者に映った。

それでも俺はひたすらに『蘭が好き』と信じていた。だが・・・

「あなたあんな立派な家があるじゃない。もったいないわよ。家主の居ない屋敷なんて」

コイツは窓の外に見える俺の家を見ながら頬杖をつき言った。

「やっぱ一人だと寂しいじゃん？」

「人肌恋しいんだったら彼女に言えばいいでしょ？」

コイツはそう言ったが。

俺は多分彼女に癒されに来てるんだと思う。

正直連日学校や事件で疲れている上、

待っていてももらった身分で言える立場ではないが休みの日は蘭が離さない。

しかし、以前のように蘭と一緒に居て『楽しい』と思わなくなってしまった自分が居た。

蘭はよくも悪くも今時の女子高生。

話す話題は駅前にできたスイーツの店がどうの、新しく買った服がどうのだ。

俺は俺でホームズや事件の話を一方的にしているが、蘭はただ頷いて聞くだけ。

はて、『これで本当にいいのだろうか』と。

だから毎晩、コイツと話したくてここに来てしまっただろう。

彼女は事件の時は何かとサポートをしてくれるし、

ホームズの話をして、雑誌を読んでいたと思いきやちゃんと聞いてくれたり。

表に出る部分はどうであれ、俺は単に宮野と居て「楽しい」とさえ思うようになった。
それに。

彼女の前では格好よく気を張る必要もない。

彼女の前では素でいられる。

要するにだ。

俺は宮野が・・・

「さ、今日こそ家に帰ってもらおうよ」

「えー！？俺眠いんだけど」

「すぐ隣じゃないの」

「眠くて眠くて道の真ん中で寝ちまったらどうする？」

「・・・勝手にしなさい」

こうやって会話を交わすのもすごく楽しく、心落ち着く。

待ってろ。もうすぐこの想いを、お前に。

君との時間（後書き）

アイデアってものは大切でして、しかしながらそれが浮かぶ時なんてごくまれなんですよね。

だからこうして新志コ哀の妄想を広げるとやっぱり未満な二人に行きつくわけで。

志保さんが工藤君「新一」呼ばわりしてるのはとても想像できません……

なので今後僕の小説に新志結婚ネタはないと思われ（ry
結婚したらやっぱ名前でよびますもんねえ。

次回以降もよろしくです。

終わりと始まり（前書き）

新志。蘭ちゃん可哀そうかも。
設定がベタ。

設定的に前回の話に共通した部分がありますが、まったくの別の話です。

終わりと始まり

「で？」

西の高校生探偵こと服部平次は今現在、幼馴染の遠山和葉とともに東京駅に居る。

「なんで俺がこんなところにおるんか！」

平次は幼馴染の和葉に向かって人ごみに関わらず怒鳴った。

「だってしゃーないやろ！蘭ちゃんのためや！」

事は数日前に遡る。

「なんなん？あの二人まだ付きあつたらなかったん？」

和葉は自宅で親友である蘭の友人、鈴木園子と電話で話していた。

二人ーというのは新一と蘭のことだ。

和葉と園子には知る由もないが新一はつい先月に組織を壊滅に追い込み、

出来上がった解毒剤で元の姿に戻ったばかりである。

「そうなのよ、それがさ・・・」

園子が学校での様子を回想する。

「電話くらいしてよ！帰って来たんなら！」

蘭はいきなり教室に入ってきた新一を見るなりそう言った。

声は恐ろしく張り上げているが目は完全にうるんでいる。

「いや・・・悪い・・・」

新一は苦笑いして自分の席に着きーさてとーと、蘭を見上げこう言った。

「蘭・・・」

新一が真剣な目で蘭を見たので周りの生徒はもちろん、園子も愛の告白が始まると思って息を呑んだ。

しかし。

「待っててくれてありがとーな！」

新一は途端に笑顔で蘭に言った。

周りや園子はもちろん、一番拍子抜けしたのは蘭だろう。

こう言うどヘンな誤解を招きそうだが蘭もきつと『推理の答え』なる愛の告白を待っていただろうに。

ー結局、この二人は何の進展もないまま高三の夏休みに突入したー

「蘭はさあ、表は笑顔で居るけど新一君をきつと待ってると思うのよ。あの子そういうとこだけは臆病だから自分で話を振れないじゃない？だからさ、和葉ちゃんと私で蘭を後押ししてさ、平次君には新一君に言ってもらおうよ」

ーってなわけで、真夏の東京にこの二人は来たわけであるー

「別にそれはアイツらの問題であって、俺たちがどうこうっちゅう問題やないんとちゃう？」

平次はこう言うことに消極的だ。

言ってることはあながち間違いではないが。

しかし「ちゃう？」の「う」を言い終わるか言い終わらないかのうちに和葉がすごい剣幕で平次に迫った。

「アホー！このままじゃ蘭ちゃん可哀そうやろ！」

まるで新一は悪者扱いである。

気乗りしないまま、和葉は毛利探偵事務所へ、平次は工藤邸に向かった。

「まったく。来るなら連絡ぐらいよこせよな」

突然の来訪者に昼寝をしていたという新一は頭をかきながら平次をジト目で見た。

「まあまあ。俺だって来たくて来たわけとちゃうから・・・」
そう言って平次が机の上に目を移すと・・・

「なんや、お前毛利の姉ちゃんに朝飯作ってもらっとるんか？」
机の上には目玉焼きに食パン・・・他と朝食定番メニューが置かれていた。

もう昼過ぎだが、きっと事件か何かで朝食を食べる機会を逃してそのままにしてあるのだろう。

平次はてっきり蘭が作ったものと思ったが。

「いや、宮野が作ってくれたんだ」

平次は一瞬、宮野？と思ったがすぐに思い出した。

ああ、あのちっこい姉ちゃんの本名やな。

彼女も新一とともに本来の姿を取り戻し、

今現在は都内某所の研究所で研究員として働いているらしい。

元に戻って初めて逢った時はあまりに美人だったため驚いたのを記憶している。

「なんであの姉ちゃんが作っとるんや？」

平次の素朴な疑問。

「俺が頼んだんだー蘭だと悪いからな」

はたしてこの男は蘭に悪いと思ってても志保に悪いとは思わないのか。
一瞬平次はそう思ったが、特に気にも留めず、そのうちかかってきた和葉からの電話に出た。

―数時間後、新一と平次、蘭と園子と和葉は海に来ていた―

「女っちゅうもんは思い立ったら即行動やから疲れるわ・・・」

泳ぐ気がさらさらない新一と平次はとりあえず水着を着けているものの、上にジャケットを羽織り

海辺ではしゃぐ女三人をボーッと見ていた。

「ってゆうかよー、なんでオメー今日いきなりこっち来たんだよ？」

新一が隣の平次を見ていった。

「え？そ、それはやな・・・」

新一と蘭をくつつけるため。

なんてとても言えない。

平次がなんとか言い訳を考えようとしていたその時。

「キヤーッ！」

毎度恒例、海辺から女性の悲鳴が聞こえてきた。

「まったく・・・平次が行くところ事件しかないんやから！」

「そんなことないよ！きつと新一が・・・」

和葉と蘭は毎回この二人が行くところに事件が起きるのですっかり事件現場に慣れていた。

被害者は三十代の男性で、毒物を飲まされ殺された後に海に投げ込まれたとみられている。

「ってゆうてもなあ・・・容疑者はみんな薬品会社勤務やし・・・」
毒は容疑者三人誰にでも手に入った。

「ああ・・・せめてその毒の種類が分かれば・・・そういえば！」
新一の表情が急に明るくなった。

平次は怪訝な顔をする。

「アイツに聞いてみつか・・・」

「アイツって誰やねん？」

何せ新一の言うアイツはいっぱいいるので平次が尋ねる。

「宮野だよ」

三十分後。

黄色いテープの貼られた内側に居た新一、平次、蘭と園子と和葉に警備員の声が聞こえた。

「ダメですよ、事件なんですから」

警備員はその女性を止めようとするが。

「工藤新一に呼ばれたんです」

その女性のはっきりといった。

「え？」

蘭達女性陣は驚いて振り返る。

この三人以外に新一に女性の知り合いなんて居たか？
という疑問があった。

すると脇から新一が走って行って言った。

「すみません、僕の助手です」

新一はその女性―志保に向かって手招きをした。

志保はそれを確認してテープをくぐった。

「蘭ちゃん？誰なん？あのすごい綺麗な人。工藤君の助手らしいけど・・・」

「私も・・・今日初めて知った・・・」

蘭は少し俯いた。

今までは事件で知り合った人物さえ自分に教えていたのに。
蘭は戸惑った。

「まったく。いつから私はあなたの助手になったの？」

志保は履いていたのだろうハイヒールを右手に持ち、運動靴を履いて現場に来た。

「あなたの行くところ行くところ事件ばかりね。服部君と一回お払いでもしてもらったら？」

「おいおい・・・」

久しぶりに心から笑う新一を見て蘭は心が痛んだ。

新一は志保を遺体の近くに連れて行った。

つられて女性陣も遺体の傍に近づいた。

実際は志保の存在がとても気になっているからだ。

志保は慣れた様子で遺体を目で追っている。

するとあるところで志保は目を止めた。

「どうした？」

「シアン化カリウムね・・・青酸カリ」

志保はため息をついた。

「海に沈められていたんなら、胃の中にも水が入っているはずだからあの独特のアーモンド臭が消えていたのよ。ま、犯人もそれが狙いだったんでしょうけど」

志保はこんなもの、というように立ちあがって振り返った。

志保のあまりの洞察ぶりに新一や平次だけではなく、志保の真後ろに居た女性陣も驚いていたためいきなり振り返られて女性陣は少し引いた。

志保は女性たちを見てフツと微笑み、新一と平次を振り返った。

「せっかくの海でのデートも、あなたたちの呼んだ事件のせいで台無しね」

「う・・・」

志保に言われるとそんな気がして新一と平次は黙ってしまった。

結局、志保の推理は当たり犯人は容疑者の中で唯一青酸カリを扱う薬品会社に勤めていた男性だった。

さてとーと志保が帰ろうとした時。

「宮野さん・・・でしたっけ・・・」

蘭が志保を呼んだ。

志保は静かに蘭達を振り返る。

改めて見ると本当に綺麗な人だ、と改めて女性陣三人は思ってた。身長も蘭達より五センチほど高く、それがより一層その魅力を引き締めている。

「何？」

志保が問い返すとー

蘭が口を開いた。

「新一とはどういう関係なんですか？」

「安心しなさい。彼とはなんともないから」

志保は蘭の少し強引な質問にも表情を崩さずに言った。

しかし、蘭はまだ不服そうだ。

「でもっ！」

無理もないだろう。

いきなり『大好きな幼馴染』に助手です、と現れた志保に、内心蘭も少し動揺している。

「私は確かに彼の助手だし、私は彼に絶対の信頼を寄せているわ。でも、それ以上でもそれ以下でもないから安心しなさい」

そう志保が言ったのを確認すると、蘭は少しほっとしたような顔をした。

しかし。

「おい。オメー助手ってなんだよ。そんな雑な関係じゃねーだろ」
割って入ったのは新一。

『余計なこと言いやがって・・・』
事情を知っている志保と平次は一瞬新一を睨んだが、新一は気にしていないようだ。

「あなたバカ？私の存在がどれだけ蘭さんを苦しめているのか分からないの？」

志保はこっそりと蘭に聞こえぬよう新一に言う。

しかし対する新一の返事は、蘭にも筒抜けな声で返ってきた。

「なんでオメーと俺の関係に蘭が関係あるんだよ」

その瞬間、蘭は表情をゆがませた。

確かに、二人のつながりは元は組織だから蘭には関係ない。

しかし事情を知らない蘭にとってその言葉は一番辛い言葉だった。
待っていたのに。自分はずっと。

半憎しみの表情で二人を見ると・・・

「あなたって本当に女心に疎いのね」

「んなことあ十分承知だよ。俺が言いてえのは・・・」

「はいはい、もういいわ。あなたと話していると疲れるから」

志保はそっぽを向いてしまった。

「おい！俺の話を聞けェ！」

「つまらないわ」

「んなつもりで言ったわけじゃねえし！」

蘭は気づいた。

以前の自分と新一にそっくりだと。

つまらないことでケンカして、言い合いするところが。

もう自分は新一の中では過去の人間だ。

そう考えると、蘭は口の中でそっと呟いた。

「終わっちゃった・・・私の初恋・・・」

俯く蘭とは対照に、いつまでも言い合いを続ける新一と志保の姿があった。

終わりと始まり（後書き）

水でアーモンド臭が消えるかどうかは知りません（笑）

やっぱり新志を語る上で蘭ちゃんは無視できない存在なんじゃないかと。

逆にいえば、蘭ちゃんあつての新志ですから。

いや、新志コ哀が好物（爆）というだけで蘭ちゃん嫌いなわけじゃないですうん。

素直で良い子だなと。

感想お待ちしています。

次回以降もよろしくです。

※11日、タイトル変更しました。

Umbrella (前書き)

新志。 前回の話は編集して一話完結にしたのでそちらを。
二人は付き合っていない設定。

Umbrella

ついてない。

出かけるときは確かに降ってなかったのよ。

言い訳なんてバカらしいなんて思ってたけど、ついそう言いたくなる。

昼に研究所の休み時間を使って買い出しに出た時は、急いでいたから忘れていた牛乳を買いに、

仕事が終わってすぐにここに来たのはいい。

もうその時点で雲行きは怪しかったから傘を家に取りに帰ればよかったのだ。

疲れていたから、近所のコンビニで急いで牛乳を買って外に出てみれば。

バケツをひっくり返したような雨が襲っていた。

私も・・・免許取ろうかしら。

そんなことを考えながら仕方ないので雑誌コーナーでファッション誌を立ち読みしてることにした。

雨脚が少し弱くなれば走って帰れるでしょ・・・

甘かった。

しばらくして外を見ると雨は余計に強くなっていた。

生憎このコンビニは傘を売っていない。

どうしたとか。

腕時計を見るともう夜の八時。

博士はなんとか会合とかで愛媛に行っている。

今日は一人なので時間を気にする必要はないけど、やっぱりずっとここにいるのは辛い。

もういい。

帰ってシャワー浴びればいい。

私は意を決して自動ドアを出た。
すると。

『何してんだ。宮野』

聞きなれた声。

『工藤君』

そこにはこんな夜に帝丹高校の制服を着て紺の傘をさした探偵さんの姿。

『見て分かんない？』

傘忘れたのよ、というのはなんとなく悔しかったので、少し遠まわしに状況を提示する。

『オメーも珍しいことあんだな』

はいはい、ゴメンなさいね。

私だって人間なのよ。

『あなたは？また事件？』

分かり切ったことを聞くと案の定。

彼は首を縦に振った。

『オメーさ、どうせ家隣なんだし、入ってけよ』

・・・は？

『だからよ、傘に入って行けよって』

・・・あなたバカ？

恋人でもないのに・・・

あ、相合傘だなんて。

『いいの？』

あ、私にしちゃ珍しく素直。
自分でもビックリ。

『ああ』

でもね・・・

『料金とか取らない？』

あなたは蘭さんが居るでしょ？

『取らねーに決まってるだろ！』

だから・・・ね・・・

『でも・・・キャッ！』

工藤君？貴方何してんの？

いきなり私の肩掴んで引きよせて無理矢理傘に入れるなんて。

『いいから。この雨いつまでたってもやまないぜ？』
そう。

『ありがと・・・』

あ、言えた。

『え？』

ちょっと。ちゃんと聞いてなさいよ。

大体なんで貴方少し赤くなってんのよ。

『だから・・・ありがと・・・』

こっちだって恥ずかしいのよ。

『え？あ、う！？え、おお・・・』

そんな驚かなくても。

私普段そんなに可愛くないかしら。

『じゃ、もういいから。ありがとね』

家の前まで送ってくれた工藤君を見上げて、一応感謝する。

一応・・・ね？

『なー』

なんなのよ。

『何？』

『俺、今日晩飯のあて

——ないんだけど・・・』

・・・つまり？

『だから何』

『傘入れてやったんだからさあ、晩飯を・・・一緒に』
はあ、やっぱり。

ま、今日はよしとしましょう。

『勝手にしなさい』

『ホントか？』

わーいって―― ホントに子供ね・・・

でも、こんな日も悪くないかもね。

Umbrella (後書き)

恋人の象徴ってやっぱり・・・相合傘・・・（勘違いかな？）

コ哀だと原作でも叶っちゃいそうな感じですが新志ではきつと一生見れないであろうと。

んで相合傘っても余裕で二人入れちゃいそうなのはダメなんです！

（何）

ちよっと小さめのね。

工藤君志保さん気遣いちよっと肩濡れるとか、いいですよねえ。

（妄想失礼）

次回以降もよろしくです。

相棒（前書き）

意味不明かも。

妄想に忠実に書きました（笑）

新志。

キャラ崩壊注意。

相棒

心にポツカリ穴が開いたようだ。

そんなこと言うほど詩人じゃないけど、今自分の胸の内はそれに近い状態だ。

「新一？」

振り向けば幼馴染―蘭はいつも笑顔で。

結局いまだに告白できずにいる俺を、蘭はどう思ってるだろう。

『情けない』なんて心の中でせせら笑ってるかもしれない。

この一年で俺は変わったと思う。いや、変わった。
あんなに望んでいたことなのに。

『工藤新一に戻ることに』

蓋を開けてしまえば何故か「江戸川コナン」として過ごした期間が異常なほど懐かしく感じる。

もしかしたらあの半年間が今までで一番充実していたのかもしれないとさえ思った。

あの時は目標があった。

組織を潰すこと。元の姿を取り戻すこと。

仲間もいた。

今の自分に何があるんだろう。

目標もない。ただ目の前の事件を解いてゆく日々。

仲間も、居ない。

そう、何かが足りない。

「――新一君、貴方蘭のこと好きだったんじゃないの？」

園子も含めた三人で出かけた先で園子に呼び出される。

「好きだった？」

何言ってるんだ。

今でも好きだ。

「悪いけど今の貴方に蘭を幸せにできるって思えない」
言ってくれるじゃねーか。

凶星。

きっと今の俺じゃ蘭を幸せにできない。

ゴメン。

もう少し待ってくれ。

このスッキリしない気持ちを片づけるまで。

「宮野」

家に帰ると、隣の家の門から出てきた宮野に会った
三か月ぶりだ。コイツに会ったの。

「あら工藤君」

三か月ぶりだったのにいつも通りかよ。

久々に見るコイツはやっぱり美人で。

「久しぶりだな」

何故かこの三ヶ月間コイツの顔を忘れることが無かったことは伏せておいて。

「そうかしら」

おい。思いつきり棒読みじゃねーか。

この性格がなければ。

『黙っていればいい女』なんてコイツのためにあるような言葉だな。

「ああ。三か月ぶりだ」

「あら、そう」

なんでそんな悲しい瞳めをするんだろう。

「ってか。オメー俺を露骨に避けてただろ？」

そうだ。コイツは必ずと言っていいほど俺を避けてきた。

コイツの勘に触るようなことしてねーけど。

「避けるも何も貴方連日事件で居なかったじゃない」
それもそうか。

「なあ・・・宮野」

『何よ』ですか相変わらずだなお前。

コイツに相談してみっかな

ま、どうせ軽く返されるだろーけど。

「俺、最近変なんだ」

『今に始まったことじゃないじゃない』だと？

オイ。

「何がどう変なのよ？」

一応聞いてくれるんだ。

「いや、その―――なんか、江戸川コナンで居た時の方が良か

ったなんて感じたり、その他もろもろエトラセトラ」

やっぱり驚くよなあ。

「貴方らしくないわね。あんだけ戻りたがってたのに」

あの頃はな。

「ここで立ち話でもなんだし―――入る？ コーヒーくらい入

れるわよ」

コイツが自分からこう誘ってくるなんて珍しい。

遠慮なく上がらせてもらおう。

やっぱコイツの入れるコーヒーは旨いよなあ。

そう言えば、このコーヒーを飲むのも数カ月ぶり。

「で？ まだ何か話したいことあるの？ 悩める探偵さん？」

おいおい。

その微笑みは反則だって。

ちよっと『可愛い』なんて思っちゃったじゃねーか。

まあ、コイツを可愛いと思っちゃいけないなんて決まりないけど。

「なんだかんだ言ってまだあの探偵事務所の子に告白してないらしいしね」

う。

痛いところ突いてきやがる。

「まったく、会ってもいないのにそういう情報は知ってんだな」
何となく俺はコイツのことあまり知らないのにコイツは俺のことを
妙に知ってることが悔しかった。

相棒なのに。

「工藤君――？」

気づいたら俺は宮野の隣に座ってる。

ホントに無意識。

しかもちゃっかり肩を掴んでた。

「痛いんだけど」

悪い悪い。

でも・・・少し心地いいかもしれない。

「ゴメンもう少し――――こうしててくれねえか」

俺は宮野の肩に頭を乗せる。

「貴方少し疲れてるのよ」

そう言って彼女は俺を拒まない。

ああ、そうだ。

俺に足りなかったもの――――

それは。

コイツなんだ。

やっと見つけた。

蘭には悪いけど

俺はもう、コイツなしではきっと生きてゆけない。

「そうやって貴方がうだうだ悩んでたら、蘭さんや日本の警察が泣くわよ」

ゴメン、蘭はきつと泣かせてしまう。

もう戻れないんだ。

あの頃に。

俺は変わったんだ。

蘭は幼馴染。

コイツは。

コイツは俺の

「で？何かくれるのかしら？」

いきなり俺を見たと思えばコイツは言う。

「へ？」

「肩貸したのよ？何か報酬あっていいんじゃない？」

ああ、そういうこと。

「じゃ、今度ステーキでも奢ってやる」

黙ってたらまたフサエブランドのカバンとか言われるからな。

「あら・・・せっかくこの夏新発売のフサ・・・」

「あー！もうこんな時間！俺、帰るよ」
こうやって会話を交わす時間・・・

すべてが愛しい。

コイツ（宮野）をいつか、探偵としての相棒じゃなくて。

人生の相棒にしたいから。

相棒（後書き）

最後が意味不明でしたね、うーん。

実際江戸川工藤氏の相棒ポジションは志保さん哀ちゃんにしかできないでしょうし、そういう意味では青山先生はいいポジションを与えてくれたなど。

ただということは志保ちゃんは工藤氏にとってそれ以下でも以上でもないということですね。

難しいですorz

いやあ、妄想とはいいいいものです（何）

次回以降もよろしくです。

S e c r e t o f m y h e a r t (前書き)

中学生コ哀。

倉木麻衣さんの同曲モチーフ。

S e c r e t o f m y h e a r t

彼はきっと待ってる。

いえ、絶対待ってる。

『解毒剤』の存在を。

そして彼を・・・蘭さんもまた、彼を待ってる。

全部私の責任。

まさかあの薬のデータを全部組織に消されたとは思っていなかった。

でも。

私にも言えないことがまだある。

それを・・・『解毒剤』が永遠に完成しないことを・・・私はまだ彼に言っていない。

全部言って、それで彼に罵られて、蹴られて、殴られて・・・

殺されたって構わない。

なのに。

私はまだ、貴方の優しさに甘えてる。

「今日はまた一段と早いのね」

サッカー部に入ってる彼は毎朝の練習で早めに家を出ていく。

2年になってからは毎日。

それでも今日は特に早い方だった。

「ああ。試合が近づいてるからな」

そう言って貴方はその輝く笑顔で私を見つめる。

その笑顔は私を痛めつける。

貴方と私が出会ってから・・・

いくつもの季節が過ぎたけど・・・

いつもそうやって私に笑いかける。

私は知らぬ間にこうやって罰を与えられているのかもしれない。

「ところでよー、今度も試合の時の弁当よろしくな」

なんで貴方はそうやって笑えるの・・・

貴方の・・・工藤新一の未来は・・・絶たれたのに。

言ってしまえばいい。

でも・・・どんな言葉に変えて貴方に伝えられるの？

きっと私はそれでも彼に嫌われたくないだけ。

結局は弱いだよ。

いつかは言わなきゃいけないこと。

でも・・・

私は貴方にそれを伝えられない。

もう少し・・・だけ待って・・・

ちゃんと責任は取るから。

「ちょっと・・・なんで私が毎回貴方の弁当作らなきゃいけないのよ」

こんなこと言える立場じゃないことは百も承知。

でも・・・

本当、素直じゃない。

「いいじゃねーか。こんなこと頼めるのオメーしか居ねえんだし」

・・・そうね・・・

貴方の未来は・・・私によって潰されたんだもの。

そうやって私は貴方に関わってきたのよね。

「ま、暇があればね」

「オイオイ・・・」

こんな他愛も無い会話が幸せに感じる私はきつと残酷。

だって彼は本当の幸せを・・・手に入れられなかったんだもの。

『解毒剤』のせいでアイツが悩んでるのは知ってる。

アイツは知らない。

俺がもう全部知ってることを。

でも・・・

それはアイツに言ってもらいたい。

そしてアイツにちゃんと伝えたい。

『解毒剤』なんて・・・要らなかったことを。

もう限界かもしれない。

最近、アイツとの距離が広がった気がする。

怖い。

アイツの横顔を見るたび、壊れてしまいそうで。

もっと近づきたいのに。

言ってしまうのか・・・

本当の・・・気持ちを・・・

「なあ・・・」

『蘭がさー結婚するんだー』

私は思い切り頭を殴られた心地だった。

私のせいで・・・

私が・・・葉を作ったせい・・・

私が・・・言わなかったせい・・・

もう隠せない。

『ゴメン・・・なさい・・・』

お願い。

私を・・・殴って。殺して。

そして海にでも捨ててくれればいいわ。

『本当はさ・・・解毒剤なんて・・・要らなかったんだ・・・』

何を言ってるの・・・

『お前とさ・・・一緒に・・・過ごしていきたかったんだ・・・』

どうしてよ・・・

『失いたくなかったんだ・・・オメーと過ごす・・・時間を・・・』

私も・・・失いたくなかった。

でも・・・それって・・・

『一緒に・・・生きていこうぜ・・・』

『好きだ・・・灰原・・・』

工藤・・・君・・・

『私も・・・好きよ・・・工藤君・・・』

Secret of my heart (後書き)

初めての歌詞ベースの小説なので未熟な点があったと思いますが、お許しください。

最後の四行は同曲の最後の4行の写しです。

著作権とか・・・orz

元々今倉木さんの大ファンなんですが出会いはこの曲なんですよね。当時はコナンで流れてて、蘭ちゃんが歌ってましたがどうも歌詞をじっくり読むと結ばれること間違いないの新蘭にはどうしても合わない曲じゃないかと。

なので個人的な趣味もありコ哀にしましたがwwww

感想お待ちしております。

HAYATOCHIRI (前書き)

快斗君登場。

志+快↑新って感じ。

一応新一と蘭付き合ってる設定。

いろいろ複雑。

新一くん快斗がキッドというのは知っております。
ちなみに快斗君はキッド引退済み。

HAYATOCHIRI

「あら。工藤君」

俺と蘭で一緒に映画を見に来たまではいいが。
実に三か月ぶりに会った宮野の隣にはアイツ。

黒羽快斗。

「おー工藤」

そう言ってアイツは俺をなんとも無いような顔で見やがった。

「二人とも今日はデートなの？」

隣の蘭が口を開いた。

デート！？

んなバカな。

黒羽は置いといて。

宮野はそういうの興味ないタイプだし。

「ま、そんなところかしら」

え！？マジかよ！？

あの宮野が・・・黒羽とデート！？

「志保さん、早くしないと映画始まっちゃうよ」

宮野の隣に居た黒羽が腕時計を見て言った。

「ま、そういうことだから。工藤は蘭さんとのデート頑張れよ・・・さ、行こ、志保さん」

そう言って黒羽は馴れ馴れしくも宮野の手掴んで行きやがった。
ムカつく。

え・・・？

ムカつく・・・？

別に宮野が黒羽とデートしてたところで、俺には関係ないのに。

「新一？ 私たちも、早く行かないと映画始まるんじゃない？」

蘭が俺の顔を覗き込んできた。

「そうだな」

忘れよう。

「なんだー結局同じ映画だったんだー」

上映終了後にアイツらとバッタリ会って同じ映画見たことが判明。

つか、ちゃっかりアイツら手つないでるし。

大体そのことになんで俺がムカつかないけねーんだ！

「じゃ、俺たちはここで」

映画館を出たところで黒羽と宮野が振り向いて俺たちとは逆方向に歩いていきやがった。

「新一、どうしたの？ そんな恐い顔して」

蘭に言われて我に返った。

俺・・・そんな恐い顔してたのか？

でも。

アイツ（宮野）を少し遠く感じたのは事実。

結局家に帰ったのは10時過ぎ。

あの後買い物に付き合わされ、レストランで飯を食って。
あーなんかドツと疲れた。

さっきから宮野と黒羽の姿ばかりが脳裏に浮かぶ。

なんだろう。

その時。

隣の門で音がしたので振り返ると。

「黒羽の奴、ちゃっかりアイツの家上がりこんでたのか」

なんかスゲームカつく。

門から出てきたのは宮野と黒羽。

なんだかスゲー楽しそうに話してる。

ムカつく。

ムカつく。

ムカつく。

アイツ（宮野）あんな顔で笑ったことあるか？

ただでさえムカついてた俺に追い打ちをかけるような出来事が起きたのは次の瞬間。

『! ! ! !』

み．．宮野と黒羽．．が．．

き、き．．．

キス! ?

気づいたら俺は宮野に向かって走ってた。

「今日はありがとう。楽しかったわ」

俺も志保さんを独り占めできて楽しかったよ。

工藤の珍しい表情も見れたし？
アイツ対抗心むき出しだったな。

「今度は水族館でも行こうか」

「ええ、楽しみにしてるわ．．．あ」

急に志保さんが近づいてきた。
な．．．何！？
そつと俺の頬に触れる。

え、え！

ちよ、こんなところで．．

「取れたわ」

え？

「なんかゴミがついてたわよ」

あ、ゴミね。

ビックリした。

でもちよつと残念。

そう思ってたら。

なんか横からすごい形相をした男が走ってきた。

お？工藤、やきもち？

「じゃ、志保さんまた今度ね」

アイツきつと俺と志保さんがキスしたって勘違いしてるんだろうな。
面倒なことになりそうだから帰ろ。
でも工藤。

そうやすやすとは志保さん渡さないよ？
オメーがちゃんと自分の気持ちに素直になるまで。

「はあー？キスなんてしてないわよ」

嘘つけ！

そんな俺にばれると困るのかよ！

「俺じゃ」

「え？」

もう限界。

「どうして俺じゃないんだよ！」

夜の静かな路地に、新一の声の木霊した。

HAYATOCHIRI (後書き)

ぜひ工藤氏には志保さんを選ばなかったことを後悔させてやりたい。
そういうのを儚い妄想と言うものを作者は知りません。

まだ十代も後半なのでいい出会いに憧れます。

憧れに終わらぬよう頑張ります (爆)

評価・お気に入り登録ありがとうございます。

感想も気軽にどうぞ。

11. 4 タイトル修正。ちょっといい加減すぎたので。

ともだち以上（前書き）

エロな新志。

ともだち以上

失敗した。

彼の帰宅時間に近所のスーパーに買い出しに行ってたのが運の尽き。

「なー宮野ー一緒に帰ろー」

こんな時に日本のパパラッチは何をしてるのかと思う。

決定的瞬間を撮られて週刊誌にでも載せられてテレビで報道されて赤っ恥かいて二度と私に触れないようにしてほしい。

「あ、服見に行きたいから今日は――」

「俺と一緒に着いていつて選別してやるよ」

冗談じゃない。

彼が選ぶ服は着ない方がマシなような異常に露出が多い服。

『暑いだろ』とか言っつて。

きつと冬になっても難癖つけてそういう服を着させられる。

いい加減勘弁してほしい。

こんな時に博士は学会で愛媛。

明日は仕事休むしかない。

しかもしばらくはこのくそ暑い中少し厚着しないと。

暑い。

熱い？

いや、やっぱり暑いの間違い。

彼の手が肌に触れて、その上声が聞こえるからと窓も閉めているのだ。

彼から離れようにも彼は眠ったまま私を抱きしめてるから動くことができない。

生き地獄？

うん、少なくとも今は。

お互いを求めている間は少しだって幸せを感じられるけど。

幸せ？少なくとも私だけは。

世間ではこういう関係を・・・ああ、そうセフレ。

そういうみたいだけど。

早く告白して彼女に相手になってもらえばいいのに。

何回それを彼に言っただろう。

でもなんやかんや『体の相性が合う』だのわけの分からないことを言って誤魔化される。

だから彼が私に触れる手も、重ねる唇にも、『愛』は無い。

でもそれでも一瞬幸せを感じてしまうのは、きっと私が愚かだからで。

私の幸せは一方通行。

彼にとって私はただの友達でしかないのに。

「私はそういう教え方した覚えはないけどね」

相変わらずの笑顔で話すのは彼の生みの親。

有希子さん。

「新ちゃん結構激しいのねえ、優作と大違い」

少しギョツとしたけど、まあ置いておいて。

「いい加減蘭さんに相手になってもらえばいいんですけど」

話しこんでるうちに熱かったコーヒーも冷めてしまっていた。

「やっぱ蘭ちゃんにはできないのよー新ちゃんは」

・・・私にはできると。

そういうこと？

「別に志保ちゃんが新ちゃんにとってそういう存在なんじゃなくて
」

「好きだからきつとそうするのよ」

ねえ、本当？

んなわけないわよね、あなたが。

「なあ
——宮野」

やっと離してくれた
——と思ったら私を抱きしめた
まま彼は話しました。

「俺はさあ・・・なんていうの・・・その」

「何よ、早く言いなさい」

とてもさつき色気を放って私を求めた男に見えないくらい、彼の顔は赤くなってる。

「俺は・・・好きでも無い奴抱いたりしないから

たったそれだけ。

そう言って彼は私を抱きしめた。

どういう心境で彼がそう言ったのは分からないけれど。

ともだち以上、恋人未満。

今の私たちの関係は、それで十分。

「なーもー一回」

彼が顔を私の後髪に埋める。

吐息がくすぐったい。

「ダメよ。体力が持たない」

「若いのに何を言うか」

「残念私今年で85になるの」

「オイ」

こうして言葉を交わすのも、心地よく。

私はまた、彼に身を委ねる

ともだち以上（後書き）

いろいろ意味不明ですいません。

すいませんで済む問題じゃないのは分かってます。

切腹でお詫びをorz

元々新十蘭で「ともだち以上」という小説を書くつもりでしたが、設定上未満な新志に合うんじゃないかと思い、急ぎよエロ新志になりました（殴 すいません

よくこの二人の表現に「相棒以上恋人未満」が使われますけど、志保さんに戻ったら志保さんは勝手に「自分はもう相棒じゃない、ただの友達」と考えてる設定でわざと「ともだち以上恋人未満」という表現にしました。

感想受け付けてます。

・ ・ ・ ・ ・
(前書き)

エロな新志。キャラ崩壊注意。

•
•
•
•
•
○

穏やかな昼下がり。

画質とか色合いの具合から見て相当前のメロドラマの再放送。

丁度いいところ、
というか。

ちよつと髪型が古臭いがなかなかの男前の俳優演じる主人公が去つてゆく彼女を見つめて言う。

「志保お」

え？

ああ、なんだ。

「何よ」

うつぶせに隣のソファに寝そべる隣人。

声の主は彼。

のそり、のそりとほふく前進に似た体勢で近づいてくる。

「久々に会ったのに『何よ』はないんじゃないの？」

冗談のような、はたまた漫画のような半目で睨んでくる。

「未成年なのに連日事件に首突っ込んで午前様のあなたに言われたくないわ」

今の今まで寝てたからか、ちょっと彼の顔はむくんでるような。

でもやはり世の女性に騒がれるだけあって整った顔立ちをしている。

「そんな言い方しなくてもなあ」

プクう、と細い顔を目一杯膨らませて。

当たり前だけど、迫力はない。

「ほら、見なさい。あなたが話しかけてくるから肝心なところ見逃したじゃない」

思い出してテレビに視線を戻せばすでに主題歌と共にテロップが流れている。

ああ、あの俳優さんそういう名前なのね、とちよっと小さな発見もあったり。

「俺とドラマどっちが大事なんだよ」

そんな夫婦じゃあるまいし。

「ドラマ」

今はね。

「ちょっと、みっともない、泣くんじゃないわよ」

嘘泣きなのは見え見えだが両手で目を押さえている。

いい加減しつこいので注意をすれば。

「じゃあさー、」

下を向いたまま彼がポツリ。

「俺のこと愛してる？」

またこの人は。

「はあ？」

さすがに会うたびに愛してるって言うとなんか安っぽい、
ていうかなんというか。

要するに今までだって彼には散々言わされたわけで。

「志保・・・俺のこと愛してない・・・!?!?」

人はここまで変わるものなのかそれとも。

これを日本の警察が必要としているなら日本はもうすぐ終わいかもしれない。

「愛してるわよ・・・」

私も人のこと言えないのかもしれない。

毎回言うたびに顔から火が出そうな感じ。

「え？何？聞こえませんかよ、志保さん」

頬杖について憎たらしい顔を私に向けて。

「もう、二度と言わないわ」

「俺泣いちゃうよ？」

名探偵の泣いてる姿を見てみたいものだわ。

「勝手に泣いてなさい」

昼からなんという話をしているのだ、私たちは。

たまの休みにまったりなんてあったもんじゃない。

仕切り直し、仕切り直し。

まずはコーヒーを飲もう。

そう思って、ソファから立ち上がろうとした時。

「な．．．．」

ガシリ、と腕を掴まれて。

家には私と彼二人しかない。

だからもちろん私の腕を掴む人物は．．．．

「どうしても言わないなら言わせちゃおうかなー」

あっという間に形勢逆転。

いつの間にやら私は彼の下に。

「ちょ．．．やめ．．．」

ああ、私に拒否権はないと。

口は唇で塞がれ。

今日もまたこれから

『愛してる』

という言葉を経度も言わなくてはいけない

.....
(後書き)

うーん。意味不明。

妙にほのぼの新志が書きたくなって数日間ずっと研究してたんですがその成果がこれ。

やっぱエロになっちゃいました・・・

タイトルはご自由に解釈してください。

一応二人は付き合ってる設定なんですがね。

ちよっと行間を取り過ぎたなーと思いつつ。 12/28 タイトル
変更。

C a n ' t g e t e n o u g h ~ g i m m e y o u r l o v e ~



かなりマニアックな曲ですが倉木さんの同曲モチーフ。

新志。

長い！

C a n ' t g e t e n o u g h ~ g i m m e y o u r l o v e ~

切ない胸の奥

君への想い描く

優しい君の声

「宮野、」

彼に会うのは何ヶ月ぶりだろうか。

少なくとも・・・半年以上？

それくらい会ってなかった。

きつと彼に黙ったまま街を出れば怒って引き止めるだろう、博士は最初そう言ったけど。

なんで私を引き止める理由が彼にあるのかと笑って流したら。

博士の言った通り、彼は追いかけてきた。

「車、買ったのか」

助手席に座る彼はどこか不機嫌そう。

どうして彼がそこまで私にこだわる必要があるのだろうか。

解毒剤に副作用とか、何か欠陥があったとしたら？

そしたら博士か誰かが血相を抱えて連絡をしてくるだろうし、
だとしたら彼が私をわざわざ電車で尋ねてくるわけがない。

東京とはいえ信号が比較的少なく、住宅街だった米花町とは違い、今私の住む東京都心は、

信号と信号の距離が極端に短い。

イコール車が走ってる時間より止まってる時間の方が長い。

だから尚更車内に気まずい空気が流れる。

私もそうだが彼もなぜか口を開きずらそうで。

こうなれば我慢大会のようなものだ。

この我慢大会に勝利したのは私だった。

彼が口を開いた。

「解毒剤のさ、お礼がしたくて」

そんな今更、なんて言おうとしたら。

「お前さあ、よく分からねえブランドものとか好きだったじゃん、服なんかどうだ？」

久々に会ったというのに、なんて緊張感のない人――

と感じたのと同時によく分からないブランドものはブランドものとは言わないだろうなんて感じた自分もいた。

聞きたいことなんてない。

きっと彼は幼馴染の彼女とすでに彼氏彼女の関係になっているのだろう。

そのうち婚約だの披露宴だのの話になるだろう。

今回はそれを言いに来たのか、と彼が来た時はさすがに戸惑った。

もしそれが事実になっていたら？

一度封印した想いは離れば離れるほどエンドレスに私の心を支配した。

私はまだ、十分になれていないのだ。

「なんで今更」

入るのを躊躇うほど豪華な店に、少し動揺しつつ、それでもやっぱりまだ彼の行動が理解できない。

「これなんかどうだ？」

ちょっとあなた、聞いてるの、という言葉は喉の奥に。

彼が指した服の値札に少し驚いてしまつて。

ゼロが5個も付いてるほどの値のするこの服を、簡単に「これどう」なんていう彼はやっぱり。

「あなた金銭感覚おかしいわ」

「そうか？ あ、あとこれなんか」

ああ、これが族に言う「ボンボン」ってやつね。

大体彼女でも女にこんな高い服を買おうとしているなどおかしすぎる。

「もういいわ、工藤君。行きましょう」

「これ、着てみるよ」

ポン、と押しつけられた服の値札。

案の定、結構なお値段。

あのねえ、なんて遅いか。

淡い紺色というのは彼にしてはなかなかセンスがいいが。

いくらなんでも。

「別にパーティに行くわけじゃ、」

厳密に言えばワンピースに近いけれど、どう見ても装飾なんかはドレスにしか見えない。

本当、何がしたいのか、彼は。

いきなりふらりと現れては買い出しに行こうとした私の車に便乗し、

解毒剤のお礼とか言って服を買ってやると言えば

けた外れの高い服を渡した上、

着るより飾った方がいいんじゃないかと思うくらいの服を私に着せようとして。

理解ができない。

「おい、まだかよ」

着て、似合わないとしても私が言えば無理に買うこともないだろう。

とりあえず私が着たのを見れば、彼は満足なのかもしれない。

「はいはい、着たけど？」

シャツと、試着室のカーテンを開ける。

「・・・・・・・・」

目の前に映る女性は・・・・・・・・

元々素材は完璧だ。

それにドレスの装飾やサイズも影響して、彼女を美しくドレスアップしている。

体中の熱が、顔に集まっている気がする。

やっぱり、俺は

「ん
くど．．．くん」

いきなり彼が試着室にどこかから入ってきたかと思えば。

目の前にあるのは、彼の．．．顔．．．

そして、唇に触れているのは．．．

「ちょっと!?! 工藤君!」

急いで突き放して、と言っても力いっぱい押すと彼が外に出てしま
うので加減をして突き放すと。

「悪い・・・宮野・・・」

異常だ。

どうして私にあんなことを。

もしかして・・・

彼女とうまくいってない？

あの薬による空白の時間の影響で？

だとしたら、私は。

どう償えばいいのか分からない。

でも・・・

あんなことをされたら。

この気持ちユズレナイ

後悔したくない

君を誤解しそう

「俺は、」

「お前が好きだ」

なあ、宮野

やっぱりお前が居なくちゃ、俺は十分になれない

G i m m e y o u r l o v e
C a n I g e t e n o u g h g e t c l o s e r
I c a n ' t g e t e n o u g h C a n ' t g e t e
n o u g h

Can't get enough ~ gimme your love ~

(後)

タイトルの英語の訳ですけど、「十分になることができない～愛を与えてください～」という訳になります。

個人的な理想とは新志の二人はどちらかが欠けるとダメになってしまう・・・

まあ、それはある意味『運命共同体』というのでもあるのですが。だからドラマ版第二弾の香椎由宇さんの台詞には大興奮ものですね。

やっぱ新志はいいです。

今回は無理矢理に歌詞＋英語をとどころに入れてしまったのが反省点ですかなあ。

自分は麻衣さんの他に小松未歩さんZARD GARNET CROWが好きなんでこれからもうこういう曲モチーフの新志コ哀を書きたいです。

個人的にZARDは新志コ哀ソングの宝庫だと思ってます(えええ)あまり新蘭ソングありませんね、ZARDは。次回以降もよろしくです。

M i c r o p h o n e (前書き)

T H E ・ ベ タ ベ タ 新 志 。

M i c r o p h o n e

忙しい時にだって、その電話^{こえ}を聴かなくちゃいけない。

「よ、宮野」

大げさにため息をついたってお構いなし。

この前解決した事件の話。3年になって余裕をさすがの彼でも持てなくなった勉強の話。

何故こんなにも下らないことを毎日私に話してるのか不思議でならない。

妙に彼が楽しそうなのも、きっと気のせいじゃないはず。

あ、でもそういえば。

「ねえ、」

「ん？」

「最近、蘭さんの話聞かないけど——どうして？」

この頃ずっとそうだった。

学校の話になれば自然に蘭さんが登場してもおかしくないのに。

それ以前に、彼女は自分の恋人ではないか。

ねえ、どうして。

プツン

冷たく、機械的な電子音が響く。

彼は何も言わなかった。

私が、何か言っではいけないようなことを言った覚えもない。

でも、彼は電話を切った。

どうして、どうして。

「先生、どうしたの？」

買ったばかりの使い慣れていない携帯のディスプレイをぼおつと眺めて突っ立ってる私が、

よっぽど不審に見えたのだろう。

「なんでもないわよ、」

その場を颯爽と去るつもりが、後ろの方で

「彼とケンカでもしたのかしら」

と半ば爆弾発言が飛び出しているので、思わず振り向いてしまう。

「彼と私、そんなんじゃないから」

と、一言でもいえばどんどん過剰になっていくのは目に見えている。

踵を返して、その場を去るしかなかった。

どういうわけか、博士にだけ教えておいた携帯の番号が、いつの間にやら彼に伝わっていて。

先月いきなり電話をしてきたかと思ってびっくりする間もないまま、何故勝手に街を出たのか、何故俺に教えなかったのかとあれこれ実の父親のような説教が続き。

終いには今どこに住んでるのか教えろとまで言いだしたから、

あなたには関係ないと言。

それからというものの、何を思っているのか毎日私に電話をかけてくるのだ。

生徒や同僚果ては教授にまで彼との仲は良好か、まだ夜を共にしていないのかなど聞かれ、

否定すればするほど過剰に噂が大きくなって、すでに結婚秒読みだという噂まで流れてしまっている。

そんなわけ、ないじゃない。

彼には彼女が居るでしょう、なんていくら自分に言い聞かせても、
やっぱりどこかで

そうだとよかったのに、と思ってしまっ自分居る。

想いを断ち切るために、街を出たつもりだった。

「つもり」だった。本当に。

「さっきはゴメンな、本当に」

「別に気にしてないわよ、でも」

「もう電話かけてくるのはやめてほしいの」

本心だった。

結局自分は甘えてるだけにすぎない。

毎回こうして電話をかけてくる彼に、甘えてるだけ。

話を聞いてあげてる、なんて図々しい。

声を聴かせてもらってる、の方だった。

だから。

「分かった」

「ゴメンな、」

これで、良かったと、いつか思える。

「待って」

「え？」

「やっぱり、今は聞かなかったことにして」

また

「いいけど」

甘えてしまってる

「
——
」
「はいいいけどよ、ちょっと玄関のドア開けて
みて」

「は？」

「いいから」

廊下に続く曇りガラスの付いたドアを開け、仕事用のハイヒールが片方傾いて脱ぎ捨ててある玄関に向かう。

ガチャ、と扉の開く音。

イマイチ彼の意図が掴めない。

徐々にマンションの廊下が私の瞳に映る。

と、普段は排水パイプが見えるその位置に、”それ”は居た。

「どうして、」

変わってない、笑顔に目まいを覚える。

「博士に聞いたんだ、お前結構いいところ住んでんじゃない」

ズカズカと博士の家と同じ要領で彼は家に上がりこんでくる。

「ねえ、」

「お前さ、言ってたよな、なんで蘭の話しないのかって」

それは彼女とケンカをしたから、どうせ彼のことだからそうだろう
と思ったけど。

真剣な顔を見る限りそれは無さそうで。

「俺、蘭と別れたから」

耳までおかしくなったか、それとも。

「俺はさ、お前が好きだから」

「毎日声が聴きたくて、それで――」

「やめて」

自分でも驚くくらい、大きな声が出た。

「わざわざ来て私をからかいに来たの」

「違うよ、俺は本気で――」

「帰って」

嬉しい？ 悲しい？

もうどうでもいい。

自分を好きだと言ってくれたことより、天使のような彼女を悲しませた彼が許せなかった。

「分かった、帰るよ」

彼はこういう顔をしているんだろう。

机に突っ伏して何故か涙している私には、分からない。

「でも俺、本気だから」

「お前これからも電話していい、って言ったよな」

「勝手にしなさい」

ボタン、と扉の閉まる音。

ああ、もう。

やっぱり。

私はまだ、彼と電話で声を聴くことで十分だったのに。

でも、私は彼には弱いから、きっと明日だって明後日だってその次だって。

彼からの電話を出てしまう、きっと。

M i c r o p h o n e (後書き)

タイトルは浜崎あゆみさんの曲から取ってますけど、内容は特に関係は無いのですが。

なんとお詫びをすればいいか。いかにセテストだーなんだーで一カ月以上更新をしませんで著しく文章力が落ちてまして。よおこれを掲載する気になったなあ、と誉めてください(図々しい

補足・・・要りますかね？要らないですか。話の流れが掴めねえよバカたれの感想などが来たら補足編集追加しますorz

完成度の低かった第五話を消去しました。リメイクしてアップするかもしれません。

次回からもよろしくです。

f u t u r e l o v e r (前書き)

未満な新志。

future lover

窓にまだ残ってるシールの痕を爪で剥がしながら、後ろで何やらごちよごちよ言ってる彼の方に振り向く。

「良かったわね、安い事務所見つかって」

「“安い”は余計だ」

「本当のことじゃない」

てっきり金持ちのボンボンだから親に家改築してもらって作るのか
と思っただけ。

窓にはまだ『（有）××清掃』の文字の痕が。

前はビル清掃会社の事務所だったらしい。

さすがに床と壁の色あせがひどいので替えたらしいけど。

机や椅子は前の事務所の物をそのまま使うらしい。

「あなたってヘンなところケチよね」

「僥倖家って言えよ、ケチって聞こえが悪い」

「このソファは買い換えるのよね？」

「おい！」

うるさい彼は無視して、私は古めかしいソファを指差す。

座面の茶色い革が破れて中のクッションが見えてしまっている。

「ああ、もちろん、だからさ」

と、彼は私の腕を掴んできた。

「ちょっとホームセンターまで付き合ってくれ．．．」

「ああ、私そういえば博士に昼ご飯を．．．」

「博士は学会で愛媛だろ」

一体どこを走って来たのか、都内の車にしては珍しく汚い彼の外車のRVの助手席から見える景色を、

ボーっと眺めて。

こんなにもつまらない。

何が面白のかさっきから嬉しそうに、楽しそうに彼はずっと喋りっぱなし。

「どうしてあなたの事務所の整備に私が付き合わなきゃいけないのよ」

そもそもそれ。

大体めでたく彼が自分の探偵事務所を持つことになった、と昨日嬉しそうにいきなり報告してきて来て。

朝軽く様子を見に行ったつもりがそのまま午前中ずっと彼の荷物の運びいれやらなんやらの手伝い。

帰ろうと思うたびに悪びれもなく彼が「あ、それ運んどいて」だの「これ置いてきて」とか。

帰る隙が無かった。

「そんなこと頼めるのお前しかないだろ」

「蘭さんは？」

「大学の講義があるだろ」

「ご両親・・・は居ないわよね」

「そう、そういうこと」

はあ、とため息一つ。

運が悪かった、と言えばそれまで。

「まあ、まあ、今度礼はたっぷり・・・」

「フサエブランドのカバンサイフ一式」

「なんとかしてやる」

まあ、嘘に決まってるのだけどほんのちょっとした期待と一日彼と一

緒に居ても悪くないか、という思いもあつて。

「ああ、そうそう」

物珍しく私がカーナビをいじっていると彼が思い出したように口を開いた。

「お前さあ、いま何も仕事してねえよなあ」

「ええ」

してないわけではない。

一応都内某所の研究所には勤めてるけど夏に休みが無かったから長

期休暇中なだけで。

「だから何」

「いや、さ俺の助手してくれねえかなあって」

「はあ？」

「はあ？って・・・」

それ以外言いようがないじゃない。

「なんで私」

「だって相棒じゃねーか」

「あなたねえ」

分かってない、何も。

相棒っていうのは私たちがまだ仮の姿だった時の関係じゃない。

今はただの隣人にすぎないのに。

蘭さんにも悪い。

「しないわよ」

「なんでだよ！？探偵には優秀な助手が必要だろ」

「探偵より助手の方が優秀じゃない」

「お前なあ」

嬉しい半分、複雑な感じ。

嬉しい？

それはいつか胸の奥底に仕舞い込んだあの気持ちのせい？

それは分からないけど。

「助手になりそうなのはあなたならすぐ見つかるわ」

「俺はお前に助手してもらいたいなあ」

「私だって仕事があるのよ」

「期間限定でいいからさ、」

「じゃあブランド物のスカート買ってもらおうかしら」

「ああ、まかしとけ」

「さっきのフサエブランドのサイフとバッグ一式とは別よ」

「はあ!？」

分かりやすいというか、なんていうか。

少し彼の顔色が悪くなったような。

きっと気のせい。

「当たり前じゃない」

期間限定ね、期間限定。

f u t u r e l o v e r (後書き)

無意識新志より、無意識工藤氏、だったo r z

実は工藤氏は志保さんに惹かれ始めてるんだよゝつてのを書きたかったんですが。

やっぱ難しい。

タイトルの解釈はご自由に。

T i m e g o e s b y

それでも、時間ときは流れていくのだから。

「新しん一いちさあ、聞いて」

頬杖をつきながら朝食を食べる俺を見て、蘭が一言。

「赤ちゃんがね、できたみたいなの」

「へ――？」

「何、その間抜けな声」

クスクスと笑う蘭を、ただ茫然と見つめることしかできなかった。

とうとう父親かあ。

「何カ月？」

「三か月だって、昨日病院に行ってきたの」

蘭はすでに母親のような優しい笑みを浮かべている。

「もう結婚して3年だもんなあ」

「ねえ、早いよねえ」

って、ことはあの出来事からも3年、ってことか。

どこまでも、白い肢体、そして朝陽に照らされ金色に輝いていた髪を、今でも忘れない。

どうして抑えられなかったのか、何が俺をそうさせたのか分からないまま。

半身を起して考えてるうちに、宮野は目を覚ました。

「あの、さ」

「別に気にしてないからいいわよ、謝らなくても」

謝る、謝らないじゃなくて。

「でもね、聞きたいことがあるの」

「え？」

「あなたは私をお情けで抱いたの?」
——それとも、蘭さんの代わり?」

「そんな、」

「ゴメンなさい、そんなわけないわよね」

「ああ」

一言一言が胸に突き刺さるような気がするのとは。

「冗談よ、多分解毒剤の副作用だと思うわ」

「宮野、本当に」

「だから」

わざとなのか、宮野が遮る。

言葉一つ一つは何故かまるでロボットのように、宮野は淡々と話す。

「だったら蘭さんを抱けばよかったじゃない」

吐き捨てるように言ったのは宮野を、ただ茫然と見つめて。

頭がぼーっとする。

「蘭の代わりに抱いたわけじゃねえよ」

「じゃあ」

「あなたは私を愛してるっていうの？」



「それ、誰かに報告したのか？」

一番大事なことだったりする。

妊娠の報告。

「えっと、お父さんとお母さんにはこの後電話するつもりで、まだ園子にも和葉ちゃんにも言っていないから新一だけ」

「そっか」

おっちゃんがじいちゃんになんのかあ。

まあ、母さんがばあさんになることの方が俺は心配だけど。

「新一もちゃんとおじさんとおばさんに連絡しなさいよ、あ、あと博士と服部君にも」

「分かってるって」

「あと誰か居たかな？」

「えっと・・・」

目暮警部とか高木刑事にも言っておいた方がいいか。

あと・・・

「いるんだけど教えられない奴居るんだよなあ」

「え？」

「連絡先もどこ住んでんのかも分からねえんだよ」

「ああ、」

「宮野」



「それは．．」

言葉に詰まる。

愛してる？

いや、でも。

「バカなこと聞いて悪かったけど、愛してもない女を抱くのははやめた方がいいわ」

「俺はさ」

「愛してるよ、宮野を」

「なんの冗談？」

「いや、そんなこと冗談なんかで言わねえよ」

それは間違いないと、言い切ることができる。

宮野に触れることで感じたのは、確かに愛だった。

でも、

「俺は蘭も愛してる」

それも確実に、言いきれることに変わりはない。

今も、そしてこれからも。

「なら、あなたはどっちを選ぶの？」

「え？」

「蘭さんと、私。分かりきったことよね」

俺はどっちを選べばいいんだろう。

物心ついた時から一緒にいた蘭と、ひよんなことで出会った宮野。

きっとてんびんで測ったとしても、今の時点では釣り合ってしまうだろう。

でも、一つだけ。

「宮野」

「どっちか選べって言われたら、宮野」

「どうして？」

うろたえたような目で、宮野は俺を見る。

「お前の前だと在りのままで居られるっていうか……ヘんな看板背負わなくていいんだよなあ」

蘭の前だと、強い男と言う看板を背負わなくてはいけない。

でも、コイツの前では？

強さ、弱さ、すべてありのままに。

「それは理由にならないわ、残念だけど」

「え？」

否定された考え

頭には？の文字。

「今からでも間に合うわ。その看板を、蘭さんの前でも下ろせるようになりなさい」

「でも」

心のどこかで、俺はきっと本気で宮野が好きだった。

蘭を裏切ることになった。

「あなたは蘭さんを愛してるんでしょう？」

「あ、ああ」

「だったら大丈夫よ」

「そのうちそんなこともあった、って笑って会える日が来るわ」

「だから私のことは忘れなさい、しばらく――」

そう言って、宮野は服を着て、部屋を出ようとする。

「おい！」

「さよなら、工藤君」

「愛してたわ」



「ホント、ぱったり居なくなっちゃったもんね、宮野さん」

「ああ」

窓の外の雲の流れが速い。

「博士も知らないの？ 宮野さんの連絡先」

「らしいけどな、まあでも」

いつか笑って会える日が来る

T
i
m
e

g
o
e
s

b
y

Time goes by(後書き)

新蘭前提の新志でした。ELTのかの名曲、「Time goes by」をベースに。

ちよつとシリアスものを書きたくって。

ただ無理にシリアスに走ったせいで支離滅裂なのは許してください。

新志前提の新蘭にする予定だったんです、本当は。ベースの曲も最初は浜崎あゆみさんの「You were...」か、ZARDの「カナリヤ」にするつもりだったんですが、ランダムに曲を聞いてたら「Time goes by」ベースに書きたくなりまして。

それで内容も変更しました。要するに、見切り発車な内容ですorz

ここまで読んでくださりありがとうございました。

次回以降もよろしく願います。

c r o s s r o a d (前書き)

浜崎あゆみさんの「c r o s s r o a d」をベースに。
新志前提の蘭ちゃん一人語り。
後半志保さん登場。

子供を車で保育園まで送って。

何気ない毎日を、忙しく暮らしてるけど。

昔の私は今の景色せいかつを想像できたんだろうか。

今日は仕事休みだし、カラーボックス欲しかったことを思い出して、ちょっと隣町のホームセンターまで車を走らせることにした。

30分くらい走って、運悪く目の前で赤信号。

目の前にバイパスが通ってるから、多分ゆうに5分は待つと思う。

ふと、交差点の角に目をやった。

4階建てのオフィスビル。

恐らく2階部分に「テナント募集」とあるから、1フロアごとに独立してるタイプのよう。

ふと、3階部分の窓を見て、驚愕(?)する。

「工藤、探偵事務所」

それは、甘酸っぱい青春の思い出。

あの時立った分かれ道の始まり

選んだのはこっちでよかった？

1年半ぶりに帰ってきた新一が選んだのは、私なんかじゃなくて、もっと。

綺麗で、頭良くって、新一^{あいつ}のことちゃんと理解してくれてて。

勝敗を付ける？なんてバカなことしないけど、あえて付けるなら私の完敗だった。

「蘭、ホントにごめん」

必死で、隠しきれない涙を見せる私に、アイツは言った。

謝ってほしく無かった。

今までの関係さえも、崩れる気がして。

「ずるいよね、謝ればすむと思ってる」

だってそう。

今更足掻こうとは思わない。

でも。

「新一は好きな人と付き合えるんだもんね、私は．．．」

長年、一緒に居たから、分かってる。

新一が、本当に私に心から悪いと思ってることぐらい。

でも、結局、そういうこと。

新一は何一つ失うものは無い。

私は．．．私は？

新一は言った。

「ずっと、俺蘭の前だと強がってた」

「そうやっていつも新一は自分を守って来たんだね」

傷つかないように、強がって。

人のことは言えない。

私もそう。

「私は、新一のことなんとも思ってたから．．．
！なんで私に謝ったのかも、意味分らないし．．．」

最後の、強がり。

変わって行く事変えて来た事

変えられない事

私は、上手く笑えてた？

強がりには、最後まで強がりでしか居られない。

路地を一本入ると、そこは、懐かしい思い出達が。

でも、苦しい。

あれから、何度も想い出を塗り替えてきたけど、やっぱり消しきれない。

消しちゃいけない？

大学は、新一たちとは違う学校へ行った。

高校を卒業してすぐに、米花町を出て、お父さんもお母さんも今は都心に暮らしてるから、

この街にくるのは、えーっと。

うわあ、10年ぶり。

だんだん記憶から消えていった、私が、18年間暮らした街。

大人になって行く程に失って

大人になって行く程増えてく

これは一体？

今日中に組み立てたいから、なるべく簡単な構造のカラーボックスを探して。

そういえば、熱帯魚の水槽のポンプが壊れそうなんだっけ。

考えているうち、前から来る綺麗な女性が目に入る。

それは、10年ぶりに見る。

それでも、ぜんぜん変わってない。

「宮野．．さん？」

「——蘭さん？」

宮野さん行きつけなんだそう、お洒落なカフェ。

とても一人で入る勇氣は出ないような、そんなお店。

コーヒー一杯こんなに！？ってくらい。

「10年ぶりよね」

「え、えっと・・・うん」

敬語がいいのか、ため口がいいのか、分らず。

「何も連絡なかったから彼がしばらくはおどおどして
たわ」

「彼って・・・新一？」

「それ以外居ないわ」

おどおどされても。

「聞きたいことはいっぱいあるんだけど、10年も連絡無かったものね、よっぽどのことだろうし。もっとも」

窓の外を、宮野さんは見つめる。

綺麗な、横顔。

「その原因を作ったのは私だけどね」

「そ、そんなことっ」

宮野さんが笑った。

私も笑った。

「私、結婚したんです」

「え？」

「2児の母なんですよ」

また、笑った。

宮野さんは笑わない。

目が大きくなってる。

「そんな驚くことかなあ、宮野さんだって」

「私だってまだ一人しか居ないわ、随分頑張ったのね」

「別に頑張ったわけじゃ」

会ってみたい気もした。

宮野さんと、新一の血が入ってる、子供。

「うちは上が男の子で、下が女の子なんです、宮野さんとは？」

「男の子」

男かぁ、やっぱホームズオタク？

でも宮野さんがしつけしたら逆に新一の趣味分からなかったり。

「毎日と言っていていくらいホームズの話する彼を呆れた目で見てる、可愛い男の子」

ああ、やっぱそっちタイプだ。

「母親になるまで分からなかったけど、子供の話するのって楽しいのね」

「そうですよ、やっぱり」

「後悔してない？」

「え？」

それは、唐突。

「彼と、幸せになれなかったこと」

「それは」

あの時立った分かれ道の反対

側にあったのはなんだった？

「してません」

「え？」

まっすぐ見つめてくる、宮野さんの目に、吸い込まれそう。

本当に、きれいだなあ、悔しいなあ。

でもね。

「私は、後悔してません」

「それは、私のため？」

「え」

返ってきた問いに、啞然となる。

「私のために、言ってる」

「違います」

これだけは、

「私は、いますごい幸せです、それに、いまの人と結婚しなかったら、私の子供も生まれてなかったし」

「そうよね」

「宮野さんだってそうでしょ？」

「——ええ、私もすごい幸せ」

「ならいいじゃないですか」

「あなたって本当に、」

嘘でも、偽りでもない、本当の。

今、私は幸せ。

「今日のこと、彼に話していいかしら？」

しばらく話しこんでいたら、宮野さんが聞いてきた。

「もちろん、アイツ、いま――」

「探偵事務所開いてね、まあ、実力と工藤新一っていうブランド力？　があるからなんとかやっていけてるわ」

まあ、「工藤新一」だもんね。

事務所が少しぼろかったから心配だった。

「彼ってちょっとケチなところあるみたいね」

まあ、ヘンなところが。

でも、そういうのもひっくるめて、全部好きだった、私の初恋の人。

「蘭さん、」

「え？」

「あなたすごい幸せそうよ」

「——ありがとう、宮野さんもね」

「そうね、」

かつての女子高生同士、今は子を持つ二人が、笑いあう。

ヘンな光景？

うーん、でも。

あの時立った分かれ道の始まり

選んだ方はこっちでよかった。

c r o s s r o a d (後書き)

えらく長くなりました。

一応、前話の「Time goes by」の対で逆バージョンなんです。

こっちに対応させて前話の方を手直しするかも。

たまーに蘭ちゃんも書きたくなります。

浜崎あゆみさん割と好きなんです、意外と新志コ哀ソング多いことには驚きだったりしますw

まあ、自分がそう解釈してるだけかも。

ここまで読んでくださり、ありがとうございます。

次回以降もよろしく願います。

Black Winter.

イライラする、という表現は正しくないのかもしれないけど。

冬と言えば、雪っていうのは。

空を見上げる。

今にも、落ちてきそうな空。

でも、落ちてくることはない。

「今年っでもうすぐ雪が降るんだよねえ！」

「今年は寒いみたいですからねえ」

「去年は灰原怪我してたからよお、雪降っても何も出来なかったんだよねあ」

急に名前を出されたので思わず体が震える。

隣には冬もくそもあるか、とも言いたそうな仏頂面の誰かさん。

「だよ、」

「え？」

「アイツらはお前と雪遊びがしたいって」

「あなたねえ」

ふと、視線を感じる。

少し悲しそう（？）な目が六つ。

私を映してる。

「灰原さん、雪嫌いなのか？」

「もしかして、去年怪我したのがちょうど雪降ってた時期ですからトラウマになったとか？」

「そうなの？ 哀ちゃん！」

「え、ちょ、」

思わず笑ってしまう。

トラウマ・・・ねえ。

そう言われればそうなのかも。

「別にそういうわけじゃなくて、私寒がりだから。ただそれだけ」

誰でも思いつきそうな嘘を並べて、それでもそれを「そっか、良かった」と信じてくれる、純真な天使たち。

「お前やっぱりまだ去年のこと引きずってんのかよ？」

「え？」

今度は前の三人以上に丸く大きい彼の目が、眼鏡のレンズ越しに私を映してた。

「去年の・・・その、組織に襲われた時の」

「別に気にしちゃいないわ」

「そっか」

雪が降ってないうちは、別に。

雪が降ったら、また。

「クリスマスパーティー？」

しばらくボーっと歩いていると、前から素っ頓狂な彼の声。

「誰の家でやるんだよ？」

「コナン君の家でやるわけないじゃん！もちろん、博士の家！」

「……だ、そうだけど？」

今度は一気に八つの目が。

「いいんじゃない？喜ぶわよ、博士も」

「やったー！じゃあ、哀ちゃんから博士に言っというてね！」

「ええ」

無邪気に喜ぶ、三人の天使。

三人をなだめつつ、演技なのか、本気なのか、喜んでる実年齢18

の彼。

私も、あんな風に。

・ ・ ・
っていうのは、今更無理な願い。

純真から、私はいつからか遠ざかっていたもの。

「おーい、灰原」

気付いたら、目の前にいつしか見慣れた、偽小学生。

「何よ、いきなり」

「珍しく暗い顔してるからさ、また何かヘンなこと考えてるんじゃないかと思って」

「例えば？」

「『真っ白い雪なんて黒い私には似合わないわ』的な」

それで私の口調を真似してるつもりなのか、それとも彼には私がそういう風に見えるのか、

とってもとっても腹の立つ演技付き。

「ピンポーン」

「え？」

「冗談」

そのままズッコけた彼の横を歩いていく。

いつからか、完全に自分の心を読まれてる自分が腹立たしい。

何も分かってほしくなかったのに。

いつからか、お互いに知り過ぎた。

どれも、去年の冬の、あのことが原因？

そうだったら、私は尚更冬が、雪が嫌いになる。

「なんで俺がお前のパシリにされなきゃいけないんだよ」

ぶつぶつ文句を言う探偵さんはほっという。

12月の初めて気が早いかもしれないけれど、それ以上に気が早かった博士が買ってきた大きなクリスマスツリーの飾り付け。

例え私が元の姿に戻っても届かない、それはそれは大きな。

「せっかく飾り付けするんじゃないから、あの三人も呼べば良かったのにな」

「・・・見るのは楽しみにとっておきたいんだと」

「純粹ね」

最近何故か口が滑る。

自分で自分にブレーキがかけられない。

どうして。

「お前なあ、たまには素直にこういうの楽しんだらどうなんだよ。組織に居たころはこういうのまともにしたこと無かっただろ？」

「残念、あの組織でもクリスマスパーティーはあったわよ」

「はあっ!?!」

「・・・冗談」

毎回毎回引っかかる彼は一体。

でも楽しい。

少しだけ、笑った。

「お前なあ」

「毎回私の冗談にだまされる方が悪いのよ」

だます私もどうかしてる？

平和で、穏やかな生活に慣れてしまったから？

だとしたら、そんなことは絶対あってはならないこと。

「そういや、歩美ちゃんたちが雪がまだ降らない、って騒いでたぜ」

「まだ12月入ったばかりじゃそうそう降らんよ、雪国じゃあるまいし」

「・・・冗談じゃないわよ、ただでさえ寒いのに雪なんて」

「ついつい、本音が出てしまう、私はどうかしてる。」

「はあ？お前だからさあ、」

「寒いし雪かきは面倒だし何一ついいことなんてないわ」

「・・・雪かきなんかしねえくせに」

いつも通りの失礼な発言は軽くスルーして。

でもなんだかんだで、一番、自分の今置かれてる状況を思い出すためにも、ある意味雪は大事だったりする。

赤く血に染まった、雪。

「お前さ、やっぱり変だぞ？ここんどこ」

「いっつも変だけど、何か？」

「お前が去年のことも含めて雪嫌いなのは分かるけどよ、たまには気にしないで――」

「忘れるなんて出来ない」

今、私がこうして平和に暮らしてるのも、全部。

繋がってるのだから。

空から降ってくるのは、透明の水ばかりで、世の子供たちが望んでいる、白い神秘的な物体は結局一向に降る気配を見せない。

「今日も、降りませんでしたね、雪」

「いつ降るんだろー」

最近何をしてても口さえ開けばこの話。

ちょっと可哀そうな気もするけど、こればかりは、誰もどうすることも出来ない。

もつと、こう。

「あなたたち、雪よりもっと楽しみなものあるじゃない」

「え?」

「クリスマスプレゼント」

「ああっ!!」

その途端、雪、なんて単語は吹き飛ばされて。

「歩美、今年もいい子にしてたからサンタさん絶対来るよ!」

「僕もですね」

「俺はなあ．．．今年母ちゃんに結構怒られたし．．．」

気まぐれな雪以上に、やっぱり子供たちにはそっちの方が大事に決まってる。

と、今日はなんだか大人しい、探偵さん。

「悩んです、って顔してるけど？」

「あ、いや、その」

「何？」

大体予想はついてるから。

皮肉にも、一年間で私も彼の考えてることが分かっってしまうようになった。

「まあ、いいわ。後で家^{うち}に來なさい」

「はあ？」

「いいものあげるから」

彼にとっては、最高のクリスマスプレゼント。

「はい」

そのまま家に来た彼に、封筒を渡す。

ピンクの。

ハートのシールを貼って。

「クリスマスプレゼント」

「はい？」

「私の想いを綴った、ラブレター」

「あの、灰原サーン？」

「冗談に決まってるでしょ？」

また、ひっかかった。

本当に、この人は。

「なんだよ、これ」

「いいもの」

びり、っと封筒を破って、彼が中を覗いた。

何かに気付いて、便せんを逆さにする。

ポト、と彼の手にかプセルが落ちる。

「これって・・・」

「解毒剤」

急いで作った割には、多分結構な完成度を誇る。

「どうせクリスマスに蘭さんに会えないかって言われたんでしょ」

「あ、ああ・・・」

「とりあえず、24時間は持つようにしてるから、たまには顔見せて、彼女安心させてあげなさい」

「サンキュー、灰原——でも」

「私のことは心配ないから」

雪が降らないから、なんか嫌な予感はしない。

あの、凍てつくような、殺気に満ちた視線も、感じない。

気がする？

だから。

一人になりたい。

Black Winter. (後書き)

「Black Winter」で「雪が降らない冬」という意味です。

なかなか意味不明な文章かもしれませんが、実は次回に続く(↑え、去年の冬の事件、というのは、哀ちゃんが一回だけ志保さんに戻った、あの事件のことです。それで、哀ちゃんはナーバスになってるという。

まあまあ、次回を楽しみにしてやってください(↑ふざけんなてめえここまで読んでくださりありがとうございます)。

Winter Magic.

元々、解毒剤を渡すのは予定外だった。

ただここ数日の彼の様子を見ると、なんとなくそんな気はしたし、私もなんとなく一人になりたかったしで。

最近、とにかく彼と一緒に居るのが苦痛になってきた。

何故かは分からない。

いつも私を守ってくれてるのに、はた迷惑な話だけど。

あの三人には江戸川君は、両親のもとに帰ってる、とでも言っておけば。

自分が分からなくなってる。

逃げてる。

何もかもから。

それに立ち向かう力さえ、いまの私には無い。

だから、って理由になってないかもしれないけど、しばらく一人になりたかった。

今日は夕方から博士は食事会で居ない。

たった24時間を、私は何に使うのだろう。

少なくとも、退屈でも、去年みたいなことになるよりはマシ。

赤い雪を見るのは、もういや。

一瞬、時間の感覚が無かった。

それが、自分が寝ていたからだと気付くのに、また数秒かかった。

窓から赤や緑の光が差し込んでくるので、何かと思ったら向かいの家のクリスマス・イルミネーション。

いつしか、白い物体。

雪も降っていた。

ああ、そうだ、今日はクリスマス。

子供はサンタクロースを今かと今かと待ちわび、大人は大人で飲み交わしたり、ケーキを食べたり。

少なくとも、街ゆく人々の7割くらいが幸せそうな顔をして街を歩
く、そんな一日。

なかにはそれぞれの事情で純粋にクリスマスを喜べない、残念な人
だっているけども。

その中には一人も、私と同じ境遇の人はいない。

そう考えると、ほぼ半日を寝ては起き研究の時間に費やした私は一
体。

でも、クリスマスだからなんだと言うのだろう。

それは、ただの僻み？妬み？

幸せに笑ってる人達への。

自分に見てみれば、ただ単に「クリスマス」という名がついただけで外は夜でも明るいし人の声はうるさいで、なんらしいことはないけど。

「はあ」

不意に、ため息がこぼれる。

特に意味のない。

机に突っ伏していたせいか、ひじがバキボキと鳴る。

そういえば数時間何も飲んでないことに、カラカラになった喉で気付く。

冷蔵庫にコーラがあったはず。

せめてクリスマスらしいことを、してみようか。

顔も見ただこともない、母と乾杯。

ヘッドホンをつけ、テープのスイッチを押そうとした時。

ピンポン、という聴きなれた音と、ドンドン、と扉を叩く音が、二重に耳に入ってきた。

クリスマスだからと、調子に乗った酔っ払いか。

勘弁してほしいものだ。

ただそれが三回くらい続くといい加減腹が立つ。

実年齢うんぬんよりも姿は小学生だから、変に扉をあけるわけにはいかない。

とりあえず、すりガラス越しに騒音の主を覗く。

身長は、170ちょい。

痩せてる、多分男。

・ ・ ・ そんな男はさらに居るだろう。

やっぱり狂った酔っ払いか、と玄関から離れようとした時。

聞き覚えのある、低い声が耳に入ってきた。

「おい、灰原あ」

何やらビニール袋を持った彼は、私を見下ろしていた。

「あら、どうしたの？彼女とファンタジーでロマンチックな夜を過ごすんじゃないくて？」

「そんなんキャラに合わねえよ」

平静を装ったものの、彼が目の前に居ることにはかなり驚かせてもらった。

「いや、お前今日一人ならそう言えばいいのによ、俺を信用してねえの？」

「あのねえ、」

この人はおろか、夕方クリスマスパーティーに来たあの三人にも、今日一人だと言っていない。

博士が？

多分、そう。

あれだけ口止めしておいたのに。

「何で釣ったの？」

「サーロインステーキ」

「はあ、」

肉を前にしたら弱いのは当たり前か、甘かった。

明日あたり一日遅れのクリスマスチキンでも出そうと思ったのに、食事にステーキじゃあ。

しばらく肉は見れそうもない。

「心配してくれたのかしら？」

「あのなあ、去年あんなことあったから人が心配して来てやったものを」

「ご覧の通り、なんとも無いわ。安心して彼女呼び戻してデートの続きしてきなさい」

普段は同じ目線の彼が、急に見上げるほどになって、首が疲れる。

首を後ろで抑えながら、彼を押す。

「もう今更遅えよ」

「じゃあ、諦めて残り少ない魔法の薬の効果味わってるとね、飲んだのは出かける直前でしようから、ざっと大まかな計算であと6時間くらいよ、解毒剤の効き目」

「まあまあ、あと6時間もあるんだし、久々に元の体戻って動くのだるいから上がらせてもらうぜ」

「ちょっと．．．！」

ずかずか、という擬音がぴったりな図々しさで、靴を脱ぎ、電気を点けるだの寒いだの文句を言いつつ、ソファに彼は偉そうに腰を下ろした。

「あなたって．．．」

「ん？」

本当に、

「本当に、鈍感ね」

「はあ？」



クリスマス特番のバラエティを見て、ゲラゲラ笑いだした彼の声でふと我に返った。

洋書を閉じて、時計を見る。

10時。

いつまで居る気だろう。

もちろん、今日は泊まってく、なんて言ったら新薬ぶらさげてつまみだすつもり。

大体、ここに来たこと自体、理由が不明確すぎて。

「・・・10時かあ」
——灰原

「何よ」

「たまに元の姿に戻ったんだからよ、ちょっとハメ外してもいい
と思わねえ？」

「——と、いうと？」

「ちょっと、飲んでみよっかなー、なんて」

「……」

呆れた。本当に、呆れた。

ますます彼が分からない、というより分かりたくもない。

最初から飲むつもりだったらしい。

恐らく、さっきのビニール袋は。

「あなた小学生の前で酔っ払うつもり？」

「お前19だろ」

「今は8歳の女の子だけど？」

今の男子高校生はみんなこんななのか。

だとしたらこれからの日本が危ないのも分かる気がする。

まあ、適当に飲ませておけばいい。

クリスマスだったので、とりあえずアルコールに影響されないように解毒剤の成分を組み替えておいたから。

「なあ、」

「何」

「俺の飲んだ解毒剤、もう一個ねえの？」

「予備があるけど？」

「ああ、それぞれ――一緒に飲もうぜ、灰原」

「はあ？」

何考えて、

「何考えてるの？」

「いいじゃん、灰原あ、たまにだよ、たまに」

たまにあつたら、たまつたもんじゃない。

彼ほど元の姿に執着がない私には、あの激痛に耐えられる自信なんて――

「ね、お願い、頼むッ！宮野志保に会ってみたいんだ」

「調子のいいことばかり言って」

やっぱり、悔しいけど何故か彼には弱い。

☆

焼けるような熱さ、体中をひねられているかのような全身の関節に走る痛み。

その先には、『本来の姿』がある。

立ち上がると、天井が近くて、頭を下げそうになる。

ぶつかるとはないのだろうけど、つつい頭を伏せてしまう。

扉を開ける。

「おお」

戸惑いの色が見られる彼は、私を見るなり固まってしまっている。

ああ、そうかお互いこうして元の姿で面と向かうのは初めて。

少し頬が熱くなるのを感じつつ。

戻るのは一年ぶり、普段とは一つ勝手が違う自分の体に戸惑いを覚えた。

「で？何買ってきたの？」

「あ、ああ、えっと、シャンパン」

ガサゴソ、と袋から瓶を取り出した。

彼は慣れた手つき……で栓を開けた。

「なるほど、お酒初めてじゃないのね」

「小さいころ母さんによく飲まされてさあ、俺がなかなか寝付かないと酒飲ませて寝かせるんだぜ？あ、でもシャンパンは初めてだけど」

なんとなく、あの人から彼が生まれてきたのが納得できる気がする。

そんな失礼なことは胸の内に秘めて。

グラスに口を付ける。

「あなたにしてはセンスいいわね」

「何気に失礼だよな？」

「あら、そう？ 誉めたつもりだけど」

「へーへー、ありがとうございますーす」

彼がそう言った瞬間、顔を見合わせて笑う。

「体が戻っても、俺らって変わらねえのな」

「まあ、あなたの生意気な根性は変わらないもの、仕方ないわね」

「そーですかッ」

むっと機嫌を悪くした顔は、やっぱり私の知ってる、眼鏡の少年の面影。



「あと、30分ね」

「え？」

なんだかんだくだらない話をして、結局時間ばかり過ぎて、気付けば、

「解毒剤の効果が切れるまでの残り時間。私の場合は、あなたより4時間遅れくらいかしらね」

たまには高い視線から、小さな彼を見るのも珍しくていいかもしれない。

「残念だけどなー、俺ももう後4時間はこの姿で居るぜ？」

「はあ？・・・なんでよ、あなた蘭さんと一緒に居たんでしょう？その姿で」

「直前に飲んだ」

「・・・今、なんて」

「ここに来る直前に、飲んだ」

「・・・冗談はやめて、蘭さんは」

「断った」

頭がしびれるような感覚に陥った。

どうして、どうして、と頭の中で繰り返したって、答えが出るはずも無く。

「あのさ、」

長い沈黙を破って、彼が口を開く。

ふと我に返って、言葉を探す。

「あなた、一体、どういうつも．．．．．」

それ以上、言えなかった。

唇が塞がれた。

彼の顔が目の前に。

それは、つまり。

つまり？

「こういう、こと」

「俺は、お前が好き」

静かに、彼は言い放った。

「なんの冗談？」

「俺は、本気」

「それはつまり、あなたは私を愛してるって言うの？」

「そういうこと」

嬉しい。

単純にその気持ちだが、たちまち私の体中を支配する。

「蘭さんは、」

「昨日、電話して言った。他に好きな人できたから、って」

「いい加減に・・・」

「後悔してねえよ、別に。」
—— お前はさあ、」

「俺のことどう思ってる？」

「好きでもなんともな．．．」

「蘭に悪いから、とかはナシ」

「じゃあ、ちょっと考えさせて」

ぬくもりから離れなきや。

彼の腕をすり抜けて、小走りで地下室へ。

冷たい、冷たい、涙を流しながら。

素直に、喜べない自分と。

歓喜してしまってる自分。

0.01パーセントだってあり得ないと思ってた、そんな状況に、
歓喜してしまってる自分。

私は、普通の、この生活を守ってもらってただけでよかったのに。

どうして、どうして彼女から幸せを奪って、

私にぬくもりを与えるのか、私には分からない。

だけど確実に言えるのは、

隠さなきゃいけない。

自分のこの、醜い気持ちを隠さなきゃいけない。

それだけ。

でも、嬉しかった

私だって、本当は

Winter Magic. (後書き)

完結(?)です。あ、いやこのストーリーが。短編はまーだまだ続きます(予定です!) どうしたらこんな乱雑な文になるんでしょうか誰か教えてください(↑図々しいやっぱどうしても反り合ってしまう新志最高! なノリで生まれた作品。

次回以降はまた違う話になります。あいがとうございました。

AMBIVALENCE (前書き)

高校生コ哀。

AMBIVALENCE

前なら恥ずかしいも何も無かったのにね、いつしか。

これは、だんだん私が普通の人間になりつつあるってこと？

「あ、の。三つください……」

でも、いい匂いだと言うのは否定できない。

「毎度ありい、お嬢ちゃん。最近は寒いからなあ、一個オマケしとこうかつ！」

「えっと、はい……」

こういうのは貰つとくのがいいのだろうか、迷ったけれど。ポント、新聞紙にくるまれた熱い、熱い。

「はい、まけて1000円ね」

野口英世を渡して、なんとなく新聞紙の中をのぞいてみる。熱気が上がってきて、顔が熱くなる。

「お嬢ちゃん、芋好きなのかい？最近よく来るけど・・・」

「ち、違いますっ！・・・家族が、買って来いって・・・」

「そっかそっか、また買いに来てな」

人の顔を見ればにっこりと笑って代金を渡す同居人の白髪の老人を思い浮かべる。

博士のせいで顔見知りになっちゃったじゃない、お芋屋さんと。通学かばんを持ち直して、ゆるくなつたマフラーをかけ直して。しばらく歩いていると、なんだか芋を持ってる自分が妙に恥ずかしくなつて、ちよつと早足になった。

「おーいっ！灰原あー！」

・・・ と思ったら今一番会いたくない人に会ってしまったのだけ
ど。

あんだけ大きい声で名前呼ばれて、気付きませんでした、というわ
けにもいかない。

仕方なく、振り向く。

熱を帯びた新聞紙は、ちよつと隠して。

「何よ、あなた今日居残りだったんじゃないの？」

「うん、そうだけど？・・・ さっさと終わらせて走って来た」

「・・・ バカねえ、なんで走ってくる必要があるのよ」

「だって灰原と帰ってたかったし？」

「はあ」

まずいことになった。走って逃げようか。

いや、実際大して恥ずかしいことじゃないのかもしれないけれども。
顔だけが異常に熱くなるのを感じる。

「なんかいい匂いすんなー」

「・・・そう？」

「うん、なんかすんごいいいにお・・・あ」

わざとらしく鼻をくんくんさせて私の手元に近づく。
身を引いても、遅かった。

「もしかして・・・焼き芋？」

「・・・悪い？」

開き直るしかないか、『さっきそこで買ったの、おいしそうだったから』とでも言うのだろうか、普通の人は。
でもどうしてか、なんだか彼にだけはこんなところを見られたくなかった。

どうして？

「・・・は・・・ははっは・・・」

と、彼はいきなり腹を抱えて笑いだす。

「な、何よっ！」

「いや．．．．．だって．．．．．別に．．．隠さなくて．．．もっ．．．いいのにつ」

酸欠になるんじゃないか、というくらい彼は大笑いしていて、逆に私はつまらない。

「明日の弁当はレーズンパンね」

「．．．．．って、ええええええええっ！」

「パンじゃなくても、いいわ。レーズンだけでも．．．．．」

「いやいやいや、ちょっと、灰原サン．．．．．えっと、申し訳ありませんでした」

なんで彼がそんなにレーズンを嫌うのかは知らないけど、これが一番いいクスリ。

「丁度いいわ、そのスーパーで……」

「あーっ！ちよっとちよっと待ってっ」

制服を引っ張られる。

「本当に、このとおり」

綺麗に90度で彼が頭を下げる。
思わず吹き出しそうになるのをこらえる。

「……許す」

「よかったあ……やっぱり灰原は話が分かる」

でも実はこのセリフを聞いたのはもう何十回目になる。
毎回こうやって結局許してしまうのだから。

彼には甘い。

あ、あと歩美ちゃん。

「なあ、」

「何よ」

「その芋、もう冷めてるんじゃない？」

言われてみれば、さっきの熱気が無くなった気がする。

「あなたのせいね、余計なことするから」

「えええっ」

大げさなりアクションをする彼を横目に、新聞紙から取り出してみる。

以外に大きくて、驚く。

水滴がぽたぽた零れてる。

やっぱり、冷めてしまったようで。

ふと、強い、強い視線を感じる。

彼。

「何？」



「はあ」

「.....うんうんうんうんうんうん」

「なんかこうしてっと俺たちカップルみたいじゃね？」

「・・・ムードの無い、ね」

公園の隅のベンチに、二人並んで腰かけて。
芋を頬張りながら、言われても、ね。

まあ、元々一個はおまけで貰ったんだし。
足りなくなつて博士が泣くことはない。

「なんだ否定しないんだ」

「誰もそんなこと思っちゃいないわよ」

悲しいかな、でも周りから見ればただの恋人同士？
実際そんなじゃないんだけど。

・・・そんな馬鹿げた話が、あるわけ無いんだけど。

「そう？十分恋人同士に見えると思う」

「・・・幸せな人ね」

「ありがとうございます」

そうなりたい、なんて思ったことは、数えるほどしか無い。
でも、数えるほどはあった。

彼の、隣を歩きたいって。

必死に、抑えて、最後は、鍵かけておいたつもりなのにね。
管理が出来なかったみたい。

最近、また。

茶色い葉が風で私の前を左から、右へと飛ばされてゆく。
いつそのことこうやって飛ばせればいいのに。

おいしそうに芋を頬張る彼の隣で、そんなことを想ってみたり。

AMBIVALENCE (後書き)

ELTの同曲が好きすぎるゆえに生まれた作品。

個人的にELTは五十嵐さんが抜けた後のほうが好きです。

この曲とか「fragile」とか「愛の謳」とか「Grip!」とかetc・・・

まあ、内容はあまりリンクしてないんですがね。

次回以降もよろしくお願い致します。

ここまで読んで下さり本当にありがとうございます。

s t r a y c a t (前書き)

高校生コ哀。

stray cat

黒光りしているアスファルトを見る限り、雨が降っていたのだろう。丁度いい時間帯に本屋に居たようだ。

家に帰る途中でポツポツと雨が降っているのに気付いて、走って馴染の古本屋に駆け込んだのが1時間前。

丁度探していた洋書が入っていて、カウンターに立っても寝てばかりの御主人と当の本人も老眼をかけて本をずっと読んでいる奥さんの夫妻が経営してるこの古本屋は、言い方は悪いが立ち読みし放題だった。

分厚い洋書を棚に戻す。

一番上の棚まで簡単に届いてしまう歳になったとは。ため息をひとつ。帰ろう。

そう思った時だった。

「ああ、哀ちゃん帰るのかい？」

振り返ると老眼鏡の向こうに皺だらけの目をさらに細くして微笑んでいる奥さんの姿があった。

「ええ、もう6時になりますし・・・」

「そうよねえ、女子高生一人での夜道は危ないものねえ」

「ええ、では・・・」

「あ、ちょっと待ってちょうだい！」

目を合わさず手招きをされた。

言われたとおりにカウンターの際に近寄る。

奥の扉の向こうが夫妻の住まいになっていることは、何回も上がらせてもらったことがあるので知っている。

しばらくすると、扉の向こうから奥さんが現れた。

胸元に、黒い猫を抱えて。

「哀ちゃんに頼みがあるんだけどね、この子猫ちゃん引き取ってもらえるかしら？」

「え？」

「今日買い物の帰りに道端の段ボールの中で見つけてね、可哀そうだから拾って来たんだけど・・・うちの主人動物が苦手なのよ。2度も捨てられるなんて可哀そうだから・・・」

そう言って奥さんは腕に抱えている小さな黒猫を見た。

「やあ、と黒い子猫は小さく声を上げた。

見る限り完全な黒になっていないので、生まれて間もないのだろう。でもそのグリーンの目は奥さんを睨んでいるようにも見えた。

「分かりました、引き取りますよ」

「いいのかい？」

「ええ、うちの博士は、動物平気ですし」

「済まないねえ、一応さつき病院に連れて行ってるから健康状態は

大丈夫みたいだからね」

「そうですか」

奥さんから、私の腕に黒猫が渡される。

子猫の目をじっと見た。

どこか、人を信用していないような、でもどこか悲しげで壊れてしまいそうな、瞳。

この猫は、きっと。

「送っていくかい？」

「いえ、大丈夫です」

以前遅くなったときに奥さんの運転で送ってもらって、恐ろしい目にあったことを今でも忘れてはいない。

店を出た。

すっかり日が落ちて、ビルの間に淡い青色が広がっていた。

腕の猫をきつく抱いた。

この猫は、私だ。

「ただいま」

靴を脱ごうとすると、見慣れた靴がもう一足。

また、ため息が増えた。

引き取ったのはいいものの、とりあえず今日の猫の寢床とか、餌はどうしようと悩んでいたところに。

猫以上に手間のかかる、犬？

「よお、遅かったじゃん・・・って」

ソファに二人分を陣取ってテレビを見てる彼が振り向いた。
この眼鏡の顔にもすっかり慣れてしまつて。

「どうしたんだよ、その猫」

「なんじゃなんじゃ」

彼の素っ頓狂な声に博士が飛んできた。

いきなり自分の目の前に現れたみようちきりんな男いきもの二人に黒猫はすっかりおびえてしまった。

「大きな声出すんじゃないわよ．．．よしよし、大丈夫よ」

少し揺ると、黒猫は私をじっと見た。

「古本屋の奥さんから引き取ってきたの。今日捨てられてるのを拾って来たらしいんだけど、ご主人が動物嫌いらしくて」

「それで、引き取ります、って言っちゃったわけだ」

「．．．あなたには関係ないでしょう。博士、そういうこと」

「別にわしは構わんよ」

だって、良かったねえ、と黒猫に声をかけると、にゃあ、という返事。

「ふーん」

彼は猫の顔をじっと覗きこんだ。
すかさず猫は私の腕に頭をうずめてしまった。

「嫌いだって、あなたのこと」

「はいはい、そうですか」

ぷうっと頬を膨らませる彼に少し笑ってみる。

「とりあえず．．．タオルを持ってきて、それとミルクを入れてちようだい」

「俺かよ!？」

「図々しく人の家に上がってるんだからそれくらいしなさいよ、どうせ今日だって夕飯目当てのくせに」

「・・・はい」

2日に1回夕飯には彼が入ってくるので、いつしか食材も3人分になっちゃった。

「つか」

トン、と平たい皿にミルクを入れて、私の足元に彼はそれを置いた。しゃがんで猫をそっと皿に近づけてみると、するっと腕からすり抜けてぺろぺろと飲み始めた。

「お前、動物にだけは優しいのな」

「ええ、動物は誰かさんみたいに生意気な口も叩かないし、食費もたいしてかからないし」

「おい」

「それに言うことだって聞くしね」

「ほお、俺がお前の言うことを聞いてないとしても？」

「誰もあなたのこと言っていないじゃない？」

まあ、自覚してるならいいけどね、と付け加える。

それで『誰だろーなーそいつ』なんて言い出したら今すぐここから追い出そうと思っていた。

「なんか捨て猫とかに弱いの」

「え？」

別に言わなくてもいいことだろうけど、なんだか彼に言ってみたくなった。

心のどこかで、彼に何か期待してるのかもしれない。

「私みたいじゃない」

親も居ない上に、冷たい、箱の中でごえ続けて。

誰も信用できずに、手を差し伸べてくれた人間にも警戒する。

「確かになあ」

「え？」

自分で言ったくせに、暫定されたことに少しショックを受ける。

「何考えてるか分かんねえし、拾ってやった人間には最初平気で噛みついたりするし、そっくりだな」

「悪かったわね、噛みついて」

彼にこんなことを言ったのを、少し後悔した。

「でもこの猫もそうだけど、結局は拾われて可愛がられるわけだし」

「え？」

「辛い想いをした分、ちゃんと愛されるじゃねえか。『飼い猫』になるだろ？ まあ、ならない可哀そうなのもたまに居るけどな」

なんとなくミルクを一心不乱に飲み続けてる猫をなでた。
そっか、と心の中で呟く。

「お前は捨て猫だったかもしれないねえけど、飼い猫になったじゃねえか」

「・・・誰に飼われてるのよ」

少し納得がいかない部分。

「は？ 分かんねえの？ もちろん・・・俺・・・」

「あ、博士ね。納得」

「おい！」

少し笑った。

嫌じゃないけど彼に飼われてる、っていう言い方は少しいやらしい
言い方な気がする。

認めたくない。

でも、私に手を差し伸べてくれたのも、居場所を作ってくれたのも
全部。

「もう大丈夫だからね」

そっと、猫に呟いた。

「名前、どうする？」

彼が猫を見て言った。

満たされたのか、猫は毛布の上でその小さな体を更に縮めて寝てしまった。

「あなたが決めれば？」

「じゃあ、タマ」

思わず彼を二度見する。

「え、えっと・・・そりやまずよな・・・じゃクロ」

「あなたってそのコナンで名前もそうだけどネーミングのセンスなのね」

「うっせえ」

「やっぱ博士に決めてもらいましょうか。灰原哀なんて可愛い名前前つけてくれたのも博士だし」

横目で、彼がまたふくれているのを、なんとなく見て微笑んだ。

s t r a y c a t (後書き)

3話一挙更新の第1話目。

自分には無謀な挑戦だったとやってみて気付く馬鹿↑

ELTの「s t r a y c a t」は超名曲です。聴いてみられることをお勧め。

では、素晴らしい駄文が後2話続きます↑

**I
H
A
V
E
N
E
V
E
R
S
E
E
N** (前書き)

またまた高校生コ哀。

前話とは特に繋がってません。

I HAVE NEVER SEEN

—— 白く綺麗な世界を、見たことが無かった。

生きてくことだけで精一杯になっていた。
なのに、こんなにも余裕が。

いや、能天気？

「妬けるなあ、哀ちゃん」

つんつん、とひじでつついて来たのは、大切な親友。

「何よ」

「今日もコナン君とデートなの？」

「なっ・・・そんなわけないでしょう・・・彼とはなんでも」

「嘘だあ、恋人同士でもないのにあんなことやこんなこと・・・ふぐっ」

裏路地とは言え、住宅街の中だ。
慌てて歩美の口を塞ぐ。

「何よあんなことやこんなこと・・・って」

「えっとね、まずB組の麻衣ちゃんは屋上で二人が抱き合ってるのを見て、D組の香織ちゃんは放課後の教室でキスしてるところを見ててねえ」

指折り数えながら話す彼女にため息が出た。

「プライバシーも何もあったもんじゃ無いわね」

「大丈夫、二人ともちらっと見た後は邪魔しないようにそっとその場を離れたらしいから！」

「変な気遣いありがとうって言うておいて」

実際はそれ以上のことはしなかったから、要するに全部見られていたってことだ。

「羨ましいなあ、二人とも」

「あなただって、光彦君が居るでしょう」

「ううん。光彦君はちょっと消極的なんだよ、そういうことには」

まあ、そりゃあそうだろう。

彼なんて手のつなぎ方とかでさえ気を使いそうなタイプだ。

「意外と彼みたいなタイプはその時になれば豹変するものよ」

「そうなのかなあ・・・でも、哀ちゃんはいいいねえ」

漠然とそう言われたところで、何がいいのかさえも分からずに。

「何がよ」

「大事にされてるじゃん」

そう歩美はにっこり笑ってそう言った。

確かに、私は大事にされているのかもしれない。
でも、それはきっと。

「彼は寂しいだけよ」

「え？」

「・・・大事な人を失ったから、寂しいだけ。それを私で満たして
いるだけ」

「・・・蘭お姉さん？」

ずっと昔、あの二人は結ばれるべき関係だった。
それを引き裂いたのは。
紛れもない。

「違うと思うな」

「え？」

「コナン君は本当に哀ちゃんが好きなんだと思うよ」

ああ、きっと純粋な彼女たちには分からないのだ。

汚い世界を、見たことが無い、彼女たちには。

「だって、私は見たこと無いよ」

「何を？」

「哀ちゃんと居る時の、コナン君。哀ちゃんにしか見せないもん。あんなに愛しくてたまらない、って顔。他の人には絶対に見せない」

果たして、彼はそんな顔をしていただろうか。

人の顔を見れば腹が減っただのなんだのしか言わない彼が。そんな顔を見せられた記憶など無い。

「本人には分かんないかあ」

「ええ、分からないわ」

分かりたくもない。

「私たちなんかより、あなたたちの方がよっぽど綺麗な恋人同士だと思うわ」

「そう？だって私まだ光彦君と一回もキスしたことな．．．」

「声が大きいわよ」

少し笑った。

いつまでも彼女たちは変わらないと思う。

いつしか、いつもの分かれ道に来ていた。

「じゃあね」

「あ、うん。コナン君と仲良くねー！」

また大きな声で。

中学生の時に運動会での応援団長を務めたような彼女だ。
きっともう100m先には聞こえてに違いない。
またため息が出た。

☆

初めてキスをした時はいつだろう。
忘れそうな時もある。

「お前ひでえよなあ、初めてのキスが去年の夏で、初めての・・・」

「もうそれ以上はいいわ」

彼と話すとき、どうしようもないほど愛しい時があれば、どうしようもないほど面倒な時もある。

その中途半端な感じが、一番心地よいのだろうけど。

「灰原、」

「何」

「俺のこと、好き？」

少し彼を睨む。

声が妙に弱弱しく聞こえたからだろうか。

「何、いきなり」

「あ、いやなんとなく」

今更何が不安なのだろうと思った。
告白も何も無しにいつしか恋人同然の関係になって、もうすぐ1年。

キツカケさえ、もうこの当たり前のようになった関係に忘れつつある。

『嫌い』と言って突き離そうか。
彼のためになるかもしれない。

「言っとくけどさ、嘘つくなよ」

「え？」

見透かされてる。

何もかも彼に。

吸い込まれそうな碧い瞳には、昔から弱いのだ。

ああ、もう。

そこに魅かれたのは自分じゃないか。

「好きよ」

「・・・良かったあ」

そう言って強く、後ろから抱きしめられる。

「・・・江戸川君？」

「時々不安になるんだよな。お前が――消えちまうんじゃないかって」

耳に入ってくる彼の言葉に驚く。

口には出さないけども、彼は寂しいだけなのかもしれない。そう思っていた。

私を繋ぎ止めておくことで、自分を満たしているのなら。それでいいとさえも思っていた。

「あなたは私のことどう思ってるの」

「・・・好きだよ。愛してる」

「そう」

わけも分からず、体が何か満たされていく感じがした。

孤独で、でもどこか力強い愛情をずっと感じていた。

私は愛されてた。

「あなたのお陰で、いろんなことを知ったわ」

「え？」

「人を愛するってこと。人を信じるってこと。いろんなこと。私がずっと、見たことが無かったもの」

「俺が？」

「ええ。心配しなくても、私は——あなたから離れたりなんかしないわ。もっといろんなものを見ていきたいもの」

強く、抱きしめられた。

それに、また私も、強く応える。

今まで見たことの無い、愛情を確かに感じている。

生きていくだけで十分。

I
H
A
V
E
N
E
V
E
R
S
E
E
N

I HAVE NEVER SEEN (後書き)

いやあ、土下座したい気分。

いろいろ試行錯誤の結果、完成した作品。紙粘土で豆腐を作ったような気分↑

江戸川氏との場面より歩美ちゃんとの場面の方が文字数多いのってどうよ、みたいな感じ。

安室奈美恵さんの「I HAVE NEVER SEEN」、個人的名曲なんですが歌詞の世界観が分かりにくくて・・・

多分この二人に合ってるんじゃないかなあ、みたいなノリで書きあげてしまいましたorz

あと一話よろしくお願い致します。

先が思いやられる・・・

H a t e t e l l a l i e (前書き)

新志前提新蘭。

でも志保ちゃん出ないです。

H a t e t e l l a l i e

「さようなら」

それさえも言わずに、別れる日が続いていた。

それでもまだ、この関係を手放したくない私って、一体。

でも少し手を振った。

本当は、1ミリだって離れたくない。

嘘をついてる。

いつからだろう。

新一の心がどこかに行ってしまったのは。

少なくとも、戻ってきてしばらくは、思いこみなのかもしれないけど、新一は多分私のことが好きだった。

でも今は違うんだよね。

新一は私のことなんか、好きじゃないんだよね？

そのことを、私がもう気付いてることも、知ってるんだよね？
嘘を、ついてるんだよね？

『嫌い』って言うのは簡単だけど、言っても何も変わらない。
私にはなんのプラスにもならない。
だから、自分で首を絞めてる。

「新一！今日はね、駅前に出来たケーキ屋さんに行こう？」

「・・・ああ」

拒否しないんだね。優しいから。

それが私には痛いし、自分を絞めてるってことも、分からないのかな。

何から何まで、私のためになっちゃてるよね。

新一はそれでいいの？

「蘭！今日はパーっと飲みに行かない？」

園子がそう言った。

いつしかお酒が堂々と飲める歳になってた。

「新一君も行くのよ！蘭が変な男に絡まれたらどうするのっ！」

「ああ、そだな」

違う。

嘘は、つかないで。

新一は、もういいはずなの。

私が、誰のものになっても、もういいはずなの。

園子、気付いて。

「畜生、やってらんねえよ」

「ちよつと、園子。飲み過ぎ」

親友の違った一面と言うのは、時に困ることがある。
園子が酒癖が悪いと知ったのは、確か成人式の日の帰り。

お客さんには絡むし、タクシーの運転手さんには漠然と「私の家まで」って言って、運転手さんが困っていると運転手さんには怒鳴るし。
だからあまり一緒に飲みたくは無いのだけど。

「飲み過ぎは良くないよ、園子」

「もうちよつとだけ、」

新一と顔を見合わせて、ため息をつく。

「おーい、そこの飲んだくれ！」

飲んだくれは園子だつて。

しばらくして寝てしまった園子を、家の人に迎えに来てもらって、困った。

新一と二人きり。

「じゃな」

「あ、うん」

また、手を振った。

街の雑踏、人ごみにさらわれて、このまま新一を追いかけて、『別れよう』と言いたかった。でも、結局動けなかった。

「お父さん、ただいま」

ここにも飲んだくれ。

今更お父さんはどうしようとも思わない。

コナン君が居なくなつて、推理力が落ちたって言われてたけど、また最近調子を取り戻して景気が良くなったら休みは全部パチンコとお酒。

やってらんない。

そのまま、ベッドにダイブする。

一日が終わるたび、全部振り出しに戻る。

ねえ、新一。

私、やっぱり新一には嘘をついて欲しくない。

「新一、私たち別れた方がいいと思うの」

「・・・なんで？」

新一は、私のことなんか、好きじゃないでしょう。
分かってるんだよ。

「何言ってるんだよ。俺はお前のこと好きだよ？」

新一は優しいもんね。

でも、嘘はついてほしくないな。

「いいの、私はもう新一なんかいなくても。生きていけるから」

「・・・おいっ」

私だって、嘘はつきたくないよ。
本当は別れたくないよ。

でも、新一に嘘をつかれるのはもつと嫌。

だから、私は嘘をつくの。

バイバイ、新一。

Hate tell a lie (後書き)

記念すべき20話目！

葛藤の蘭ちゃん一人語り。やっぱり蘭ちゃんええ子や↑ 蘭ちゃんが工藤氏に他に好きな人が居ると気付いた時、やっぱり実際は工藤氏のために身を引いて一人泣いてしまうのでは、と思ったわけです。結局はなんだかんだで工藤氏は女を傷つける、と。意外とこれは短時間で書きあげられた作品。

数話一挙更新、いやまあ疲れる疲れる↑
でもやってみたかったです。

内容とか、タイトルは華原朋美さんの同曲から。自分は小さいころ桃の天然水のCM出た華原さん見て幼いながらに可愛いお姉ちゃんだなあってずっと思っていました↑ 復帰を心待ちにしています。

こんな駄文を3話連続で読んでいただき、ありがとうございました。
次回もよろしくお願い致します。

トワ・エ・モア（前書き）

高校生コ哀。短め。

トワ・エ・モア

長い道を歩んできた。
迷うこと・・・なく？

「灰原―飯」

いつだったか、工藤新一の姿を見た時に思ったことがある。
私の知らない、彼。

その私の知らない彼に、だんだんと近づきつつある、彼。

「私はあなたの炊事係じゃないわ」

「・・・まあまあ、固いこと言わず」

笑って手を合わせてくる彼を、直視できなくなる自分が居た。
その姿は、私を取り戻せなかった、工藤新一の姿。
いつからあなたはそんなに笑えるようになった？

「・・・なんで俺を見ねえの」

いきなり急にトーンの下がった彼を驚いて見る。
驚くほど彼は無表情だった。

「ごめんなさい、考え事してただけ」

「何か隠してる？」

「何も無いわよ」

「嘘だ」

「嘘じゃない」

くだらない会話を交わすのさえも、辛いことを彼は悟っているのだろうか。

休み時間でさえ話しかけてくるようになった彼が、怖かった。

「・・・もしかして、お前まだ俺を戻せなかったこと後悔してんの？」

唐突に彼の口から出た言葉に目を見開く。

バレているのだろう。

結局彼に嘘はつけない。

「ねえ、江戸川君。私はあなたを元には戻せなかった。蘭さんのもとに帰せなかった」

すべて私の罪の証。

「それでも体は年々成長していく。あの頃の工藤新一の姿に・・・あなたはそれを見て、辛くないの？」

一番つらいのは彼なのだ。

それなのに、何故か視界がぼやける。

嘘泣きをしてるようで嫌だった。

「・・・辛いさ、何回も鏡を見るたびに泣いたことだってある。江戸川コナンと呼ばれることが異常に嫌だった時期だってある。でも」
彼は私をそっと抱きしめる。

「オメーが居るからいい」

言葉に酔う、とはこのことなのだろうか。
全身に木霊するように彼の言葉が響く。

「・・・意味が分からないわ」

「え？」

「馬鹿みたい・・・こんな人間を、いつまでも生かしておくなんて」
お人好しすぎるのだ、彼は。
それが時に人を苦しめてることさえも知らずに。

「仕方ねーじゃん、好きになっちゃったし」

「それが馬鹿だって言ってるのよ」

「こうなったのも俺のせいだし、こうなったからこそ今があるんだ。
後悔なんかしちゃいねえ」

どうして彼はこんなにも優しいのだろうか。
時に痛く、時に暖かい。

「馬鹿」

「さっきから人を馬鹿馬鹿って失礼な奴だな・・・」

「だって馬鹿じゃない」

「・・・また言った」

後悔してないと言ったら嘘になるだろう。

彼だって少しは後悔してるのだ。

あの日、薬を飲まされたことから、生存率の低い完成した解毒剤を飲まなかったことも、全部。

それでも彼は運命を抱きしめて、生きている。

あなたと、私。

一緒に生きていく。

トワ・エ・モア（後書き）

なんだかんだで2話一挙更新です（笑

夜中の2時くらいに強烈な眠気の中で書いてみた作品↑何故

急に思いたったものなので、何が書きたいのかよお分からん内容かもしれないが・・・

シリアスコ哀が書きたかった、ただそれだけ。

「トワ・エ・モア」ってのは安室奈美恵さんの「t o i e t m
o i」って曲をルーツにしています。フランス語で「あなたと私」と
いう意味らしいです。フランス語ってELTの「f r a g i l e」
もそうだけど発音がなんとなく好きです。

もう一話、良かったら見てやってくださいな。

、**M A R I A**、**(前書き)**

新志。

・ M A R I A ・

「愛してる」なんて言うだけなら簡単だ。
だからこそ、言われても自分にだけでは無い可能性だってある。

例えば私に向けられた言葉だって、他の誰かに言った「愛してる」
のうちのひとつかもしれない。
蘭さんとか。

その雨は音もなく降り続いていた。
何気に窓を見ると水滴が伝っていたのだ。
なんとなく孤立したような気持ちにさえなったのは、雨のせいだったのだろうか。
そんな想いを張り巡らすうち、インターフォンが鳴り響いた。

まず先に時計を見た。
いくらなんでも夜中の11時だ。
少なくとも私の知っている人でこんな時間に訪ねてくるのは誰か、
見当もつかず。

最近セキュリティがどうたらこうたら能書きを言っていた博士が取り付けた玄関のモニターを覗きこむ。

すると、信じられない姿が飛び込んできた。

「・・・工藤君？」

傘は差していない。

実に半年ぶりに見る彼の姿は、雨のせいで服が体にぴったりと張り付いているせいか、細く見えた。

急いで玄関のドアを開ける。

「何やってんのよ!」

有無を言わずに彼の手を引っ張る。

手までこんなに冷たい。

少なくとも私がこんなに冷たく感じるのだ。

少し彼を見ると髪から水が滴っていて、頭を垂れて表情は見えなかった。

急いでタオルを持ってきて差し出したが、なんの反応も無いので少し気がひけたが強引に頭を拭いてやる。

彼はなすがままに頭を揺らした。

「お風呂沸かすから、そこでとりあえず暖房付けてそこに座ってなさい」

さっきから一言も喋らない彼に不信感を抱くも、これで風邪をひかれるわけにもいかない。

解毒剤の副作用が風邪で誘発されるかも分からないのだ。

風呂場に向けて踏み出したその時。

「・・・っ」

体が前に傾いた。

腕を彼に掴まれていたのだ。

ぞっとするほど冷たい指先が、服を通して伝わってくる。

「・・・何よ、離しなさいよ」

そう言った途端に何故か彼に始めて恐怖と言う感情を抱いた。

何を考えているか分からない。

彼が分からない。

ただ彼はまだ下を向いていた。

「いいからさっさと・・・」

「振られた」

彼の手を引き剥がそうとした片手が、崩れ落ちる。

「蘭に、振られた」

言葉が木霊する。

悲しいが夢では無いだろう。

こんなはつきりとした夢があるはずが無い。

彼が、振られた？ 蘭さんに？

そんなことはあり得ないだろう。

あれだけ彼がすべてだったような彼女が、彼を振るだなんて。

半年会わないうちに二人に何かあったのか。

彼のことだから、事件にかまけてろくに相手もしなかったとか、そういうことはありうるかもしれないが、彼女が今更そんなことで？

どんなに考えをもつてしても、答えは出なかった。

「どうし．．．」

「なあ、慰めてくれよ」

「．．．は？」

始めて彼が顔を上げた。

泣いてるようには見えないし、もちろん嬉しそうには見えない。

無表情だ。

ただその無表情は、どこか寂しいような雰囲気がある。

ああ、そういうことか。

「．．．何をしろと？」

「．．．相手しろ」

結局、そういうことだ。

愛しの彼女に振られた寂しさを、手頃な女で紛らわせたかったのだ。どうせこの二人のことだから三日もすればまた元通りになるだろうに。

「そんなことしなくても．．．」

また元通りになるわ、とは言えなかった。

その言葉を発する口を、彼の口で塞がれてしまったのだ。

長い口づけの後、彼が少し笑った。

「・・・どういうつもり」

その言葉に彼は答えなかった。

代わりの反応に、私はそのままソファに押し倒される。

拒否しなくてはいけない。

受け入れてはいけない。

これだけは、彼の言うことはきけない。

脳では確かにそう考えているのに、どうにも体は思うように動かずに二度目の口づけに応えてしまう。

体が近づいて始めて分かった。

彼は異常に冷たい。

「早く、体暖めなきゃ・・・」

「・・・お前が暖めて」

いつもよりワントーン以上に低い声に何故か頬が熱くなる。

この状況下でよくそんなことが言えたものだ。

「・・・こんなことしなくても、また蘭さんは戻ってくるわよ」

「戻ってこねえよ」

地に響き渡るような声で彼は言い放った。

「本当は分かってたんだ、最初から蘭とは上手くないって」

「・・・あなた、何を言って・・・」

「気持ちはお前に向いてるのに、ずっと隠し続けてきた・・・
だけ
ど蘭には隠しきれなかった」

強引に私を引き寄せて、彼は次々に言葉を並べて、それを聞き入れ
る私は理解が追いつかない。

おかしいじゃないか。

どうしてそこに私が出てくるのだ。
すべて理解できない。

「宮野、愛してる」

その言葉は、蘭さんのものでしょう。

蘭さんにも言った言葉でしょう。

私になんか使ってはいけない。

しかし、そう言われ抱きしめられ、それに私は応える。

どこかに置いてきたはずなのに。

どうしてこんなに波のように戻ってくるのだろう。

叶わぬ恋心を、捨ててきたはずだ。

なのに、どうして。

「傍に居て欲しくて、一緒に居て楽しくて、安心できるのは、お前
しかないんだ」

耳に響くすべての言葉が愛しい。

明日すべて幻になっていても、後悔しない。
私は構わない。

一瞬でも、彼に愛されるのなら。

・ M A R I A ・ (後書き)

最近志保さんが聖母に見えます、誰か助けて↑笑

ルーツは浜崎あゆみさんの「M」からなんですけど、「M」じゃ分からんだろう言うことで歌詞の中の「M A R I A」を使わせていただきました。

自分にとっちゃ志保さんは聖母マリアみたいな存在です↑黙れ小僧

2話同時更新いかだったでしょうか？

次回もよろしくお願いします。

Final Distance (前書き)

短編「FINAL DISTANCE」のアナザーバージョン。ただし、ひたすら暗い上にバットエンドです（まあ、ある意味ではハッピーエンドかもしれない）

新志で死ネタです。工藤氏も志保ちゃんも死にます。二人は結婚してる設定です。

それでもOKという方はどうぞお読みなってください＞m（
m＜

**F
i
n
a
l

D
i
s
t
a
n
c
e**

「ごめんなさい」

視界が曇った。

今から自分がしようとしていることに、途方もない絶望感が襲う。守り抜いてきたものを、自分で壊すなんて。

「・・・泣くなよ」

見下ろした蒼い瞳が、残酷に私を見ていた。

自分にいくら罰が振りかかろうと、それを手放しで受け入れる覚悟は出来ていたはずだった。

でも、これだけは。

これだけは、駄目。

「・・・まだ俺も未練があるのかもしれない。でも」

彼は大きく息を吸った。

「どうせ死ぬんだし？」

残酷だった。彼に一番言っただけじゃない言葉。

不思議と、涙が止まった。

泣いたってもう間に合わない。

泣けない。

「・・・向こうで会おうぜ、って・・・お前はそういうこと信じてないか」

「信じてるわ、今は」

いつからこんなに凡人になったのだろう、私は。
胸が痛む。

切ない、だのの精神的な痛みの類ではない。
医学的な痛みだ。

「・・・苦しいか？」

そう言った彼も、息をするたびに口からヒュー、ヒュー、と音が漏れていた。

不気味に白くなった彼の手が、私の頬に触れた。

そうだ。私がすべきこと。

「ごめんなさい、泣いたりして―――――すぐに楽にしてあげる」

壊れないものを、壊すこと。
それが私の最期の役目。

☆

事の発端は彼が風邪をひいて高熱を出したことだった。

A P T Xの解毒剤を含んだ自分たちにとって、市販されている風邪薬を使うわけにいかず、こういった時は私が調合した錠剤を服用し、今まで彼も私もそれでなんら問題は無かった。

しかし、その時だけは違った。

熱は上がる一方で、やっと下がったと思うと嘔吐を繰り返し、さすがの私も病院に連れていくことにした。

結局、風邪が悪化したものとしか診断されず、その後も彼は高熱、嘔吐を繰り返した。

そこで、適当な理由をつけ医師から貰ったカルテを元に、彼の体で何が起きているかを調べた。

極度に体力が落ちているとも彼は言っていた。食欲も無くなった。しかし、科学的に身体にはなんの異常もない。

イコール。

サッと頭から血が下った。

「・・・あなたと私は永遠に生き続ける」

「は？」

震える手でプリントアウトした研究データを持ち、蚊の鳴くような声で彼にそう告げた。

「あなたと、私は死なないの。永遠に」

「・・・どうということ？」

焦るわけでもなく、彼は何故か不気味な笑みを浮かべていた。
どうして。
責めてほしい。

「組織が壊滅した時に言ったはずよ、A P T X 4 8 6 9の元々の目的は不老不死。永遠に滅ぶことのない体を手に入れること。私が最後に開発した時点では、その目的は2割も達成されていないはずだった。代わりに残りの8割で生まれた特性が飲めば最後命を落とすということ。だけど、その2割が中途半端に働いたのがあなたと私そしてベルモットね。不老不死が働かない代わりに身体年齢が後退することで寿命を延ばすというある意味では目的を達成したわけ。もちろん、若返ったと言うだけで、このままだと普通に寿命になれば死ぬ」

「……ただね、解毒剤がいけなかったの。あの毒を体内から消し去るために、解毒剤はさらに強い毒性の成分を複数調合した。その解毒剤の成分が、体内のA P T Xと化学反応を起こしたの」

「その反応で私たちは自然死をしない体となってしまうたの。もし事故か何かで内臓をやられても、医学的には生き続ける。体内のA P T Xが自然消滅をしない限り」

「……だけど、もうひとつ。その副作用で、逆に私たちは極端に細菌や病原菌に弱い体になってる。風邪をひけば40度を平気で越す熱を出し、嘔吐は胃液が無くなるまで。外に出れば紫外線や僅かに含まれてる放射線にとってもこの体は耐えることは出来ない」

間髪入れずに彼にすべてを告げる。
そして、もっとも残酷な。

「……それでも、私たちは死なない」

「残された道は二つ。どこか遠くの地に離れて、仙人のように人里離れたところでA P T Xの作用が無くなるまで暮らす。ただし、A P T Xの作用が無くなると同時に私たちは寿命が来て命を落とす。二つ目」

彼は、絶対に二つ目を選ばない。

そう思っていた。

でも。

「・・・ここに二つ、カプセルがあるわ。この二つは・・・恐らくこの世で最も強力な毒性を含んでる。それこそ、A P T Xや解毒剤とは比べ物にはならないほどの」

「要するに、自分たちでおしまいにする、と」

「———そういうことになるわ」

一つ、涙が零れた。

美しくもなんともない、汚れた雫。

「・・・一緒に明美さんに会いに行こうぜ」

彼の答えは後者だった。

☆

カプセルの毒が作用し、自分たちが完全に息絶えるのには服用してから約1日かかる。

その間に、絶対に誰かに見つかるわけにはいかない。

二人きりで、最期の時を迎える必要があった。

紫外線防止用のサングラス、帽子、春先に厚いジャンパーと完全武装をする。

彼女は最後まで俺を気遣っているつもりなのだろう。

本当は今にでも壊れてしまいそうな顔をしているのに。

「外に出る前に」

「・・・何」

「最後のキス、しようぜ」

「——そうね」

そう言って、長く、深い口づけを交わした。
互いに口を塞いだけで息が上がる。

「お前は最高の相棒だったぜ——人生のな」

「最低、の間違いね」

きつと、いろいろ思うところがあるんだろう、彼女にも。
体が戻るや否や、自分が愛しているのはお前だ、と言ったあの時か
ら彼女には迷惑ばかりかけてきた。

「いや、最高の妻だったぜ」

指を絡めた。

自分が今出すことの出来る精一杯の力で彼女の手を握った。

やっとの想いで都内でも外れの山奥の山道に車を止めた。

言葉は無かったが、自然と自分たちは身に着けていたサングラスや帽子を取り、ジャンパーも脱いだ。

「なあ、お前と俺、どっちが先に逝くと思う？」

「分らないわ」

「こんな山奥で一人残されるのって嫌だよな」

「心配しなくてもそんな大きなタイムラグはないはずよ」

助手席の彼女はため息をついて外の景色を眺めた。
外に出るのは久しぶりだったはずだ。

コーラを開けた。

炭酸も口の中でひりひりとする。

「今更だけどさ、普通に死にたかったよな、やっぱり」

「ごめんなさい」

「・・・泣くなよ」
「まだ俺も未練があるのかもしれないねえ。でも」

どうせ、死ぬんだし。

呟いて、彼女の瞳から大粒の涙がこぼれおちた。

「勘違いすんじゃないぞ、俺はずっとお前と普通に過ごして生きていたかった、っていうこと」

「・・・あら、偶然。私もよ」

彼女は涙をぬぐって笑って見せた。

「生まれ変わってもさ、俺はお前のこと探して離さねえから」

「こんな状況下でよくそんな恥ずかしいことが言えるわね」

「悪いかよ」

「別に？」

「・・・・・・・・愛してるぜ？」

「————私も」

「さあ、」

もう一度、彼女の手を握った。

二度とない、なんてことは無い。

きっとまた、もう一度彼女と巡り合って。

苦いカプセルの薬が口内に広がった。
遠のく意識の中で、彼女の手だけを、ただひたすらに握った。

I
w
a
n
n
a
b
e
w
i
t
h
y
o
u.

数日後、東京都の外れの山奥の山道に止まっていた車の車内で、若い男女が遺体となって発見された。

Final Distance (後書き)

いつか「FINAL DISTANCE」の逆バージョンを書きたい、と言って楽しみにしている、とコメをいろいろ頂いたのですが、やっぱり死ネタというのはそう軽々しく書くわけにもいかず↑(大震災もあったので)

そして逆バージョンとは言え、工藤氏だけが死ぬと言うのは犯人にやられて、と刑事ドラマみたいになってしまうので・・・

途中の薬の作用は適当なこじつけですので、矛盾点があるかもしれませんがお許しください>m()m< 死という結末になりましたけど、この後の二人は果たしてどうなるのかは皆さんの御想像に・・・ (死んで帰って来た人は居ないし)

ここまで読んで下さった方、本当にありがとうございました、それと申し訳ありませんでした>m()m< 次回からは通常通りの短編を書いていくつもりですので、どうか見捨てずにいてくれましたら嬉しい限りです。

恋をしている（前書き）

コ哀の日記念小説。コ哀の美しさを汚していない小説であることを祈っています↑

恋をしている

「哀ちゃん、また？」

「ええ、」

歩美がそう聞くと、彼女は何時も同じ答えだった。

単純に彼女にとってその程度のものでしかないわけだし・・・？

（なんでアイツが）

最近のガキはませてる。

自分が言えることではないけれど、少なくとも自分が工藤新一として実際に小学生だったころは、子どもたち同士が恋愛感情なんて無視して『○○ちゃん、好き！』とか言い合えるような関係だった気がするのだ。

せいぜい色気づくのも早い子でも小五くらいだった記憶があるのに。

（小一でこれだもんなあ）

「・・・最近の子ってみんなこんな感じなのかしら」

困ったように彼女はそう呟いた。

まあ、考えてみれば常に組織に命の危険にさらされている彼女が、最近日々実年齢10以上の子たちに告白されているというのも、笑える話だったりするのだ。

「少なくとも俺が通った時はもう少し可愛らしいものだったけどな」

腕を後ろで組んで、彼女の手元に目をやる。

『灰原さん ほうかご たいいくかんのうらでまっています』

プツ

途中まで読んで吹き出したのは、自分。

「・・・幼い恋心を笑うなんて最低ね」

「あ、いやそうじゃなくって」

中途半端に大人な子ども達。

することはませてるのに、やっぱり子どもなんだなっていう。ほとんどがひらがなの手紙とか。

「・・・あなたは女性に苦勞したことないから分からないのよきつと。待ってても近寄ってくる人はごまんといたでしょう?・・・現に今も」

彼女が言おうとしていることは分かる。

歩美に・・・蘭のこと。

「随分言ってくれるんじゃないの」

「本当のことじゃない」

否定できないことも事実だった。

「告白なんてあなたには一生縁が無いでしょうね、あなたはどうぞ受け入れる側なんだろうし」

（んだよ）

少しいらついたが、こんなことは日常茶飯事だ。

いちいち腹を立てていてはきりが無い。

彼女は自分の横を早足で通り過ぎる。

小さく、でも彼女の最低限の子供の姿への抵抗だろうか。
サイズの小さなブーツを履いて。

言っておくけれどもロリコンでは無い。

けど。

（綺麗だよなあ）

宮野志保の姿を、見たことが無いと言えば嘘になる。

いつだったかのピスコの事件の時。ただあの時は自分は扉の陰に隠れていたし、とてもそんなことを言える状況では無かった。

組織のコンピューターに侵入した時。あの時は幹部名簿に彼女の顔写真が載っていた。

何時も隣に居る彼女の、もうひとつの仮面。

（今の姿が仮面なんだろうけど）

少なくとも自分だってそうだ。

江戸川コナンだなんて嘘偽りの仮面にすぎない。
でも。

「なんであなたが来るのよ」

「いや？ お前に告白仕掛けるようなやつ顔を見てやろうと思って」

「・・・小学生相手に」

「なんだよ、それ」

傘を差した。

自分も、彼女も。

（遠い）

元々彼女は自分から口火を切って話すタイプでは無い。

それはもしかすると、あの組織で発言さえ統制されていたのかもしれない、ということと。

彼女がまだ人を信じ切れていない、ということかもしれない。

「・・・居ないわね」

「・・・だな」

体育館の裏手、と言ってもいろいろあるだろう。

鯉の泳ぐ池、夏には子どもたちがはしゃぎまわる25mプール。体育館ステージの舞台袖の通入口。

どこを探しても、彼女を呼び出したはずの子は、いなかった。

「そんなものよ、」

彼女は出来るだけ声に感情を入れないようにしたのだろうか、それでも自分には分かってしまうのだ。

本当はこれくらいのことでも彼女は孤独を感じているということ。

幾度もこんなことがあったというのに、貰った手紙は絶対に捨てずに、彼女の部屋の引き出しに溜まっているということも。

自分は知ってる。

「・・・意外と優しいもんな、お前」

「何？」

「なんでもない」

優しい、単純に言っしまえば彼女はそうなのだ。

誰よりも優しい。

あの組織に居て、どうしてそんなに、と思えるくらい。

「子どものやることよ、仕方ないわ、これくらい」

手紙を折りたたんで、彼女はそれを手提げかばんに仕舞う。

「・・・本当は寂しいんじゃないの？」

「・・・馬鹿みたい」

幾分か強くなった雨に、彼女の声はかき消された。

「心配すんな、俺がいんだろ」

言い終わってハッとした。

聞こえようによつては変態でしかない・・・じゃなくって。
博士も居る、探偵団の奴らも居る。

なのに、それを差し引いて。

（なんで俺が）

「・・・病院行く？」

「は？」

「どっかで頭打ったみたいだから」

「人の好意を素直に受け止めろよ」

「・・・耳真っ赤よ？」

「うっせえ!!」

そうか、自分は今サルのようになっていると。
どうりで耳が熱いわけで。

「そういうことはいつか言うべき人のところに戻れた時までとっておくものよ」

それが蘭を指していることくらい、知ってる。
今までだってそうだ。

命を賭けてまで守りたい、と思った奴は、蘭しかいなかった。
だけど。

（撤回するつもりなんか、）

「撤回するつもりはねえよ」

驚いたように目を丸くした彼女と、視線がぶつかった。
だって明らかに自分は。

恋をしている。

恋をしている（後書き）

意味不だったなあ、読み返してそう思う愚作者↑

字数多いくせに結局いつ江戸川氏が哀ちゃんに恋したのかは書いていないという。解説すると江戸川氏はこれのちよつと前から哀ちゃんに「恋をしている」ということで↑

ちなみに「恋をしている」はELTの隠れた名曲デス。

誰かの願いが叶うころ（前書き）

新志なんだろーなあ。短い。

誰かの願いが叶うころ

ルルルル、と固定電話が音を発した。

分かってる、すぐ行くから。

心の中でそう呟いても、電話はいつまで経っても不快な大ボリュームの音を発し続ける。

ため息をついて志保は立ち上がり、受話器を取った。

「・・・なんでお前来ないの」

開口一番、もしもしも無しに会話はもう始まっているらしい。

「なんのこと」

「・・・披露宴」

怒ってるの？ 馬鹿みたい。

そんな言葉を胸の奥にしまいこんで、今年もう25にもなる志保は大人の対応をする。

「仕事休めないの、どうしても。ごめんなさいね」

これは本当だ。

出勤表を手渡された翌日に届いたそれと照らし合わせて、その日は講義があると確認すると、欠席に丸を書いて出した。

「なんだよ、冷てえな。警視庁からも結構一杯来る予定なのなあ」

「・・・だから何」

宮野志保はこうしてあの時と変わらない口調で話す工藤新一が嫌いだ。

どうしてこの男のものの言い方はいちいち勘に触る。

「ねえ、もう良い？ 私資料の整理してた途中なんだけど」

「・・・あ、ちょっとまつ」

ガチャリ、とわざと乱暴に受話器を置いて、椅子に戻る。
はあ、と息を大袈裟にはいて、山積みの書類を睨んだ。
時々分からなくなる。

こんな普通の生活をしてる自分が。

穏やかに流れていく時間が信じられない。

そして思うのだ。

本当にこれで良かったのか、とさえ。



宮野志保が米花町を出たのは5年前だ。

仮の姿をようやく取り戻し、養父の阿笠博士の知り合いという研究所の所長の紹介で、仕事には困ってないし、世の中の基準で言えば自分は稼いでる方なのだろう。

ただそこでひとつ問題が起きた。

厄介な隣人の存在。

馬鹿だ、と思う。

こんな女のことを気にかけて。

工藤新一は確かに優しいのだろう。

しかし、その優しさは志保には必要なかった。

「大体あなたの結婚式に呼ばれるような仲だったかしら？ 私達」

「そこらかよっ！」

電話の向こうでずっとこけたのか吹き出したのか雑音がして、志保は受話器から一瞬耳を離れた。

「ええ、そこよ」

「あのー、ミヤノさん？」

何してるのだろう。

電話代かけてまでこんなバカバカしい会話をする必要があるのだろうか。

そう思って志保は受話器を置こうとした。

「あーストップ！！！！」

「・・・何なのよ」

「なんかねえの？おめでとう、とか」

「・・・言っしてほしいの」

「うん」

馬鹿だわ、本物の馬鹿

どうして分かってくれないのだ。

どうしてまた自分と同じレールに引き戻そうとする。

「おめでとう、終わり」

「・・・」

電話の向こうで新一は沈黙していた。

「妬いてる？」

しばらくして、新一は突然真剣な声で聞いてきた。

「はあ？」

「俺が蘭と結婚したこと」

「なんで私が」

怒らなきゃいけないのだ。

どうして二人のことに干渉しなくてはいけないのだ。

遠い街に住む彼のことなど、もうとっくに忘れたと思っていた。

披露宴の招待状が来るまでは。

「仕事があるの、切るわね」

「あー、怒ってんなやっぱり・・・自分が結婚出来ないからって・・・」

そこで彼の声は途切れた。

結婚？そんなもの。

あなたとなら。

ぎゅっと拳を握りしめた。

自分の幸せ願うほど、わがままじゃない。

ぽたぽた、と涙が零れた。

彼女の願いが叶うころ、私は泣いてる。

そんなもんだ。

自分に言い聞かせて、志保は仕事に戻った。

誰かの願いが叶うころ（後書き）

久々です↑死んでません、生きてますぴんぴんしてます。

宇多田ヒカルさんにハマってます。前からCDは取りあえず揃えてたまに聴く程度だったんですけど、最近また熱狂的にハマりました。

第三者が淡々と語ってるような、感情が入る用地が無いような感じで書きたいんですけど、ムズカシイ。

次回もよろしくお願いします。

好き、愛してる。．．．．． S a Y o N a R a .

．．． 楽しそうな鼻歌が聴こえる。

「なあ、それ何の曲？」

「．．． さあ、忘れたわ」

機械的に次々に服を折りたたんでゆく哀の背中に、コナンはどこか虚しさを感じながら微笑んだ。
きつと彼女なら作曲も出来るだろうから、自分で作った曲、ということもあり得る。

「なあ、腹減った」

「ああ、そう」

「．．． じゃなくって、なんか作って」

「どうして私？」

「今までだってそうだったじゃん」

特権だ、これは自分の。

何もかも気にせず彼女に甘えられる。これは自分だけが持つてる特権だと思う。

きっとこの特権を、永遠に自分は乱用していく。

「ソーメンでいい？」

「ソーメンでなあ．．．」

「仕方ないじゃない。何も買ってないわよ」

「夕飯どうするつもりだったんだよ？」

「
博士と外食」

「じゃあ、ソーメンで勘弁してやる」

「．．．あなたもしかして、」

もちろん、と目で合図を送る。

ご一緒させて頂きます、最後の晩餐会。

さっき哀が歌っていた鼻歌を、コナンは時々物が落ちてきそうな音程で歌い始めた。

しばらくした後、哀がコナンに近づく。

「．．．言っておくけど、一緒に来るならあなたの奢りね」

☆

コナンがその事実を知ったのは三か月前だ。

哀が高校卒業と同時にアメリカへ単身で飛び立ち、向こうの大学に通うことを、博士から突然告げられた。

その事実自体に納得できなかったし、何より哀自身が直接自分に言

ってこなかったことが、コナンには非常に気に食わなかった。

『あなたにはそのうち言うつもりだったわ』

哀はそう釈明したが、コナンには分かっていた。

なかなかコナンに切りださない哀に見かねた博士が、自分に言ってきたことを。

哀ちゃんに会えなくなるなんてさびしいよ
っ！！！！

残念です、灰原さん。

ま、頑張れよな。

口々に言った探偵団の面々の中で、コナンは一番大人げない対応をした。

多分一カ月くらい口を聞かなかったはずだ。

『ねえ、』

『ちょっと・・・』

下校途中、目の前に立ちふさがった哀を、それでも目を合わせないようにコナンは遠くを見た。

『悪かったと思ってるわよ、あなたに私が直接言わなかったこと』

『でもなんなのよ、その態度。炊事当番が居なくなるのがそんなに気に入らないの？』

哀は何故、という顔をしてコナンの顔を覗きこんだ。

何故分かってくれない。

こんなにも、想ってることを。

『お前さあ、本当に――』

『何よ』

ああ、分かるわけもあるまい。

本当は行ってほしくない、泣きながらでもしがみついても止めた
いのだ。

そして自分がそんなことを思ってるなんて、きっと彼女には永遠に
分かること無い。

――自分から言わない限り。

『なあ、灰原』

『だから、何』

彼女と久しぶりに目が合った瞬間、口元に来ていた言葉は一瞬にし
て消えていった。

☆

「哀くん、誰とメールをしておるのじゃ？」

「・・・歩美ちゃん」

「好きだったもんない、お前のこと」

「うるさいわよ」

助手席に座る哀は、必死に手元の画面とボタンの間で視線を動かす。コナンは退屈そうにそれを眺めながら。

「・・・じゃあ、出発するとするかの」

博士はビートルのエンジンをかける。

幾度も廃車の寸前にまで追い込まれた博士の愛車は、時間をかけながらも心地よいエンジンを響かせた。

積めるだけの荷物を積載したビートルは、鈍い加速を始め動き出した。

しばらくすると、哀の携帯からメールの受信を知らせるメロディーが流れる。

哀は液晶画面を見つめた。

f r o m 吉田歩美

件名 バイバイ（＾Ｏ＾）／

本文

哀ちゃん、ゴメンね・・・見送りに行けなくて。
向こうで哀ちゃんはまた新しい友達、というか親友が出来るかもしれないけど、歩美のことは覚えておいてほしいな。

私も、光彦君も、元太君もコナン君も、哀ちゃんのことずっと忘れずに覚えておくから。

辛かったら、日本に帰ってきていいからね。時々手紙も送るね。

哀ちゃん、ずっと大好きだよ（＊＾|＾＊）

歩美

窓を開けると、強い風が車内を吹き抜けた。

☆

はい、と哀がコナンに手渡したのは。

「い、ち、ご．．．オレ？」

「たまにはいいかなって」

ポーン、ポーンと機械音の鳴るターミナルで、大きめのショルダーバックを大事そうに抱えながら、哀はストローに口を付けた。
なんか。

「．．．お前さあ、寂しいなあ、とか思わないのかよ？」

「別に」

「まあ、確かにたまには帰国するもんな」

「出来ないわよ」

「は？」

コナンは目を丸くして哀の顔を覗きこむ。

「・・・なんで？」

「いくらかかると思ってたんだよ、帰国するのに。大体そんなしょっちゅう帰国してたら時差ぼけになるわ」

「・・・そんなの
——じゃあどれくらいで帰ってくる？」

「・・・・・・・・さあ、」

哀は時刻表を見ながらひたすらストローを咥えている。
コナンの顔はだんだんと青ざめていく。

「——江戸川・・・く」

コナンがいきなり顔を近づけてきたかと思うと、次の瞬間には目の

前に大きな眼鏡があつて。

何をされてるのか、してるのかくらい自分でも分かつてる。

ターミナルのど真ん中で口づけを交わすなんて、なんて馬鹿らしい。

「・・・どういうつもり」

「次に帰国してきたときに教えてやる」

「随分身勝手なのね」

「知らなかった？」

「金ならいくらでも出してやるって」

「迷惑掛けたくないの、分かつて」

コナンは黙り込んだ。

「・・・時間だわ」

コナンの腕をすりぬけて、哀は飲んでいたジュースのパックをゴミ箱に投げる。

「随分冷たいな、お前」

「・・・時間だって言ってるでしょう？」

「俺も一緒に行こうかな」

「冗談」

「・・・当たり前」

「なるべく早く帰国するから」

ショルダーバックを肩にかけ、手荷物検査場へと向かう哀の後ろ姿を、コナンはぼうつと眺めていた。

コナンは口元を触りながら、宙ぶらりんだった想いを確かめる。
彼女は、自分のことをどう想っていたのだろうか。

「なあ・・・」

もうすでに、100m近く離れて行った哀に聞える筈もない声は、
喧騒にかき消された。

哀は検査員からショルダーバックを受け取った瞬間、コナンを振り
返る。

そして、胸元で小さく手を振った。

「あ」

固まってしまったコナンは、振り返すこともできず、行き交う人々の中で呆然と立ち尽くしていた。

『可愛い・・・やられた』

明らかに熱くなってる頬をコナンは手のひらで叩いて、歩き出す。

今度逢うときは、手を繋いで歩けたら。

そんなことを考えながら、コナンは黄色いビートルに乗り込んだ。

好き、愛してる。．．．．．**S a Y o N a R a.**（後書き）

えっと、とりあえず完結です。本格的に活動休止に入ります。本当はリグレットとフラジールもう一話書いてから閉店しようと思ったんだけど．．．

なんだかんだ言って新志は妄想の上の妄想だし、自分のすべての原点はコ哀なんで最終話はこれで。1年ちよつとの期間だったけど、本当にありがとうございました。

時期はともかく、とりあえずまた戻ってくる予定なので、その日までに記憶の片隅に自分と自分の作品を留めておいてくれたなら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5272m/>

Love, Day After Tomorrow

2011年10月7日03時48分発行